

銀賞受賞作品

青き翼のモランデル

八十八やそはち

甲高いエンジン音の鳴り響くこの狭い機内は、ティナにとって慣れ親しんだ場所だった。赤く染まった夕映えの空、高度三〇〇メートルを飛ぶのはティナの操る一人乗りの小型レシプロ戦闘機『M・16C』通称〈モラन्दル〉だ。薄い青色に迷彩されたその機体は、ずんぐりした木製胴体の先端におよそ九〇〇馬力の空冷エンジンを搭載している。主翼は機体底面から突き出した低翼単葉になっており、その下にはコンパクトなボディとは対照的な大きな固定主脚が突き出している。

そんな小さな力持ちともいえる〈モラन्दル〉は、自身の特質をこれでもかと主張しながら快調な唸りを上げて空を駆けている。大型の旅客機とは異なる力強さだ。

しかしながら、機体の機嫌の良さとは裏腹に操縦者であるティナは相棒との単調なフライトに飽き飽きしていた。

かれこれ三時間も巡航飛行を続けていれば、慣れたものとはいえ固い座席のせいでお尻が痛くなってくる。このときばかりは女であることを後悔せざるを得ない。また性別に関係なく、長時間飛べばお腹は減るし、騒音と気圧差で耳は痛くなるし、操縦桿を握る手も棒のようになってくる。

今日という今日は我慢の限界だった。

単なる書類の郵送ごときで遠方の基地まで往復六時間のお使いフライトを命じられたティナ

は、上官を恨まずにはいられなかった。

女だから舐めているのか、私の相棒は郵便機じゃない、と食ってかかりたい気持ちもあったが、そんなことをすれば「これだから女は」と蔑まれる口実を与えてしまうだけだ。軍人である以上、女であろうと男であろうと命令されれば粛々と任務を全うする他はなかった。

——せめて自由に飛び回りたい。

パイロットであれば誰もが一度は抱く願望が込み上げてくる。

ふと周囲を見渡してみると、西の空は夕焼けで緋色に染まり、東の空は夜の帳が下りて濃紺に覆われている。まばらに漂う雲は赤や紫色の化粧を纏い、地上の森は光を乱反射させて絵画のように輝いていた。

今日は最高の空だ。

こんな空を飛ぶ機会は二度とないような気がしてくる。そして、空に魅せられたからこそパイロットになったのだということを思い出す。

胸の奥で何かを爆発させたティナは、おもむろに機内を密閉している風防を開け放った。

淀んだ空気は一瞬で吐き出され、肌を刺すような冷たい突風が全身を襲う。不快なエンジン音はプロペラの風切り音にかき消され、心地よい音色が耳を覆った。

最悪のフライトが最高のフライトに変わる瞬間だった。

高度三〇〇メートルの上空では、ティナと〈モラन्दル〉の行く手を遮るものはいない。

もはや大空全てが自分のものになった心地だ。

「やっぱりこうでなくっちゃ！ アンタもそう思うでしょ？」

大空に向けてそう言い放ったティナは、固定していたスロットルを一気に最大まで押し上げる。多量の燃料を注ぎ込まれた〈モランデル〉は、ティナの問いかけに答えるかの如く喜びの悲鳴を上げ、プロペラは一層高い音を奏で始めた。

〈モランデル〉の調子に満足したティナは、操縦桿を乱暴に倒しフットペダル優しく踏み込む。小さな機体は鮮やかに淀みないロールをきめ、そのまま反転急降下に入った。

降下する機体は増速を続け、体を襲う突風は強さを増し、機体の主翼も軋みをあげ始める。それらの変化すべてが刺激となり、脳内にアドレナリンが満たされていく。もやは速度計を見なくとも五感で速度を感じとることができる。

そして機体が限界速度に達しようとしたその瞬間、ティナは重い操縦桿を一気に上げて全身で遠心力を受け止めた。

頭から血が抜けて眠気のような感覚が襲ってくる。俗に言うブラックアウトだ。この感覚に負けて気絶してしまうと、機体と共に永遠に眠ることになるので全身全霊で意識を保つ努力を行う。この生死の境を彷徨う感じがたまらないのだ。

機首を上げ終わると、機体は一転して垂直上昇を始める。昇れば昇るほど機体は減速し、あっという間に失速寸前まで昇りきっていた。

そしてエンジンの推力が重力に負けて機体が降下を始めるその瞬間、ティナはおもむろにエンジン停止させた。投げ上げられたボールのように上昇と落下の境目を通過する機体は、一瞬だけ空中で静止する。

風切り音もエンジン音も止み、無音の中で水平線が一望できる瞬間が生まれる。ティナはこの一時がお気に入りだった。

ティナにとつて空は自由の象徴であり、全てを受け入れてくれる楽園に他ならない。

あたかも天国から地上を眺めているような感覚。それは抑圧された矮小な自分を空に溶け込ませて解き放たんとする願望が作り上げたものだった。

そんな夢心地は一瞬で終わりを告げる。

推力を失った機体はそのまま自由落下を始めるが、ティナは慣れた手つきで左のフットペダルを踏み込み、機体を一八〇度ヨーイングさせ降下姿勢へと復帰させる。失速した機体を振り下ろされた金槌に見立てて反転するその機動は『ハンマーヘッド』というテクニクだ。

危険なアクロバット飛行に満足したティナは、そのテンションを落とすことなく自由気ままな飛行を続ける。手近な雲を翼で撫でてみたり、背面飛行で地上を眺めたりしては嬉しそうに微笑んでいた。

「ずっとずっと飛んでたいね」

そう呟いたティナは、優しく操縦桿を撫でる。

度重なる操縦によって〈モランデル〉の操縦桿は手の形に合わせて塗料が剥けていた。その小さな手形が、ティナと〈モランデル〉を繋ぐ証そのものだった。

二人は無限の空を踊り続ける。

時にはティナがリードし、時には〈モランデル〉がリードする。二人は魔法の解ける日没まで美しく舞い続けた。

2

「どっやったら燃料を五割増しも食う飛び方ができるんだ？ 教えてもらいたいものだな」

窓の外から聞こえる鈴虫の声に被さって、嫌みたっぷりの小言がティナの耳に刺さった。これこれ二〇分は鈴虫と小言のデュエットを聴き続けている。

飛行場に併設された指揮所の中で、ティナは上官である飛行隊長から叱責を受けていた。

隊長は深く刻まれた顔のシワを歪めながら、呆れた目つきでティナを見つめている。

中年にしては老けて見えるその顔には疲れの色が浮かんでおり、不出来な部下が問題ばかり起こすので最近になっていっそう老けこんでしまったようだ。

対するティナは、特徴的な青い瞳を大きく見開き、堂々と起立しながら隊長に対峙している。そのあからさまな態度は、傍目から見れば反省しているというより「真面目に話を聞いていますよ」とアピールしているようにしか見えなかった。それが普段からあっつけらんとして世渡りという言葉を知らないティナらしさの表れでもあった。

今のティナは、飛行服ではなくダブついたカーキの軍服に身を包んでいる。飛行中は結い纏めている自慢の黒髪も綺麗に下ろされ、肩にかけていた。そんな大人びた魅力を持つ一方で、まだ成人していないその顔つきは整いながらも幼さを残しており、一見ただけでは飛行服を着て空を飛ぶ姿など想像すらできない。むしろ司令付きの秘書か軍属の看護婦と言った方がよっぽどそれらしい。

「俺の話を聞いているのか」

先ほどからカラ返事ばかりで反省の色を見せないティナに対し、隊長はいっそう不愉快そうな声をあげて顎をさする。ティナの方はというと、早く話を済ませると願いながら返事だけは威勢よく返すのであった。

なぜティナが叱責を受けているのかというと、その理由は明白である。先の空輪飛行における任務外の行動——つまり好き勝手に飛び回っていたことが隊長にバレてしまったからだ。

バレた経緯もまた単純である。自由気ままな空輪飛行を終えたティナが整備班に燃料の補給を頼んだところ、予定より多くの燃料が消費されているのを不審に思われ、それを密告されたのだ。

確かに落ちたり昇ったりを繰り返して、更には寄り道で遅れた分を増速で穴埋めしようと思えば燃料をバカ食いするのは当然だ。密告した整備兵を恨む気は無いが、気を利かせて黙ってい

てもいいじゃないかとティナは内心不満に思っていた。

「まったく、どこで道草を食ってきたんだか。空に草は生えてないはずだがな」

「ですから、天候不良で進路が乱れてしまったと先ほどから」

「今日は全土で無風の快晴だ。貴様の回りだけ小さな嵐が付いて回ったのか？」

「あはは……」

ティナは苦笑い浮かべつつも、さすがに今の態度は軍人としてあるまじきものだなと自覚していた。それが許されるのも隊長の威厳の無さ、良く言えば親しみやすさ故に他ならなかった。

対する隊長の方も上官のメンツを保つためこうして叱責の場を設けてはいるものの、実のところは輸送任務という損な役回りをティナに命じたことを多少気にかけていたようだった。そんな隊長の気づかいにティナはつつい甘えてしまふ。

「もついい、この話は終いだ。貴様にはもつと別の話がある」

「は、別の話ですか」

急な話題転換にティナは若干の焦りを覚えた。どうも先ほどまでの小言とは違い、真面目そうな雰囲気漂いつつある。ついに懲罰を受けるレベルの「遊び」がバレしてしまったのだろうか。ティナの思考は悪い方向へと流れていった。

そんな様子を気にもとめない隊長は、おもむろに机の中から封筒を取り出して乱暴に投げやった。

ティナにとって見覚えのあるその封筒は、なんと今日飛んで届けた書類と引き換えに受け取った封筒そのものだった。しかし、緊急かつ極秘の輸送品であるらしいこの封筒と、ティナ自身の関係性は皆目見当がつかなかった。

隊長は封筒を見つめながら深く椅子にもたれて話を切り出す。

「貴様、例の義勇軍に志願していたな」

「義勇軍といいますが、某国の内戦に派遣してもらうアレですか。確かに志願したような気がします」

ここで言う義勇軍とは、数か月前から内戦を続けている某国の現政府を支援するために組織される部隊のことである。つまり、内戦をしている他国に軍を派遣して体制を元の鞘に戻してやろうという動きのことだ。

お上は「国際貢献」と銘打って義勇軍派遣の目的をあくまで治安回復としているが、その実態は某国への政治介入に他ならない。支援してやる代わりにウチの国を贖身しろと脅しをかけるわけだ。

そして同様の思惑を持つ国は世界中に存在している。となれば、各国がこぞって軍事介入を行うことになるため、某国の内戦はいつのまにか一大代理戦争の様相を見せているのが現状だった。治安回復などあったものではない。

国家とは理性的なのか本能的なのかわからないものだ、とティナは他人事のように思う。

しかし、特定の政治思想を持つわけでもないティナがなぜ義勇軍に志願していたのかと言うと、単に「志願するのが普通である」という周囲の流れに沿って志願を募る名簿にサインしていたに過ぎなかった。その適当さたるや、当の本人も半分忘れていたほどである。

ティナは話題の不透明さに当惑して内容を聞き返す。

「それで、その義勇軍が何か？」

「おめでとう。貴様はパイロットとして義勇軍に選出された。その封筒の中身は最高司令部長官からの直々な通知書だそうさ。わかったらさっさと荷造りしてここから出ていけ」

思いもよらぬ隊長の発言に、ティナは言葉を失う。まさか自分が義勇軍に選出されるとは思ってもよらなかった。それに選ばれるハズがない明確な理由もすぐに思いついた。

「しかし自分は女です。問題ないのでしょうか？」

「俺は知らん。だが、上はどうも女であるからこそ貴様を選んだような節がある。ウチの隊からは貴様の同期であるレイラも選ばれているしな。貴様らは、女パイロットの価値を見定めるために選ばれたのかもしれない」

ティナは、名誉であり重責でもあるその抜擢を素直に喜べなかった。

自分は女パイロットを代表するような器ではないことは重々承知しているし、それに女であるという荷を負って空を飛びたいと思ったことなど一度もない。明らかに役者不足だ。

「自分にそのような大役を果たせるとは思いませんが」

「俺もそう思う。だが、腕だけは十分だと認めている。貴様の实力は訓練ではなく実戦で初めて生かされるものだ」

実戦——その言葉にティナは鋭く反応した。確かに義勇軍として派遣されたとすれば、待ち受けているものは腕と腕を競い合う本物の戦いだ。下らない訓練や郵便飛行とは訳が違う。

自分の腕を公式な場で証明することができる。それは、空を飛ぶことでしか自分の存在を主張できないティナにとって願ってもないことだった。

打ち震え出すティナを見た隊長は、顔を背けてため息をつく。

「実戦と聞いて興奮するのはいいがな、実戦はいいことばかりじゃないぞ。むしろ辛いことの方が多い」

諭すような隊長の口ぶりに、ティナは疑問を覚えた。

「何故です？ 隊長は前大戦の英雄じゃないですか。実戦では華々しい活躍によって永久の名誉を得たとお聞きしましたが」

「なんだ貴様、その話を知っていたのか」

飛行隊長の榮譽ある過去は隊内では有名な話だった。加えて、隊長が自らそれを語ろうとしないのは自分の活躍を鼻にかけていないからだと噂されていた。

ティナにしてみれば、語られざる過去の栄光をこの機会に褒めたつもりでいるのに、隊長の方は芳しくない反応を示している。むしろ、その後ろめたそうな表情は自分の過去を知られる

のを拒むようでもあった。

そんな様子に、ティナは一段と不思議に思う。

「前大戦では爆撃機乗りだったんですね。単機で敵地に侵入し、捕虜収容所の塙を爆撃して味方の捕虜を逃がす特殊任務を成功させたとお聞きしております。凄いじゃないですか」

称賛を重ねてみても、隊長の態度は変わらなかった。むしろ、余計に目を反らして何を話しか考えあぐねているようだった。ティナはそれを見て照れ隠しだと勘違いしていた。

隊長は何かを決めたように向き直り、おとぎ話でも始めるかのような優しい口ぶりで全てを語り始めた。

「あれは無意味な任務だった。そもそもだな、簡単に塙を爆撃するというが、目標から一〇メートル外れば塙は破壊できないどころか爆弾が収容所に命中して仲間を殺してしまう可能性すらあったんだ。現に、俺の爆撃で死傷者も出ている。味方を殺す任務があったものか。それにな、確かに俺は塙を爆撃することに成功したが、そこから脱走に成功して無事に本国まで逃げ延びた捕虜はたったの三人だった。他の連中はどうなったかって？ とりあえず脱出だけした連中は一〇〇人近くいたようだが、三人を除く他全員が逃走中に捕まるか射殺されるかしたようだ。そして、捕まった者の半分が見せしめに処刑され、もう半分はより厳しい収容所に入れられて殆どが獄死した。俺は三人の仲間を助けるために八〇人以上の仲間を死に追いやったわけだ。そんな俺が英雄とは甚だ馬鹿らしい」

隊長の告白に、ティナは返す言葉もなかった。不意な展開とは言え、自分の態度が隊長を傷つけたことくらい他人の感情に鈍いティナにもわかっていた。

ティナは償いのつもりで精いっぱい頭を回転させ、話を繋げる努力をする。

「しかし、捕虜の脱走成功による戦意の高揚や、混乱による敵後方への負担、加えて精神的ダメージは計り知れないものがあつたはずですよ。それは無意味と言えません。違いますか？」

「ふむ、俺を慰めるつもりか。貴様も偉くなったものだな」

そう言っつて話をはぐらかした隊長は、はにかんだかと思うと次の瞬間にはいつもの顔に戻っていた。その笑顔は、ティナが見たことのない隊長の持つ別の顔だった。

「なにせよ、実戦に出るとはそういうことだ。脅かすつもりはないが、貴様も少なからず似たような体験をすることになるだろう。覚悟しておけよ」

「ご忠告ありがとうございます」

ティナの内心は複雑にならざるを得なかった。未だに実戦に対する熱意は消えていないものの、隊長の言うような体験をしたときに自分がどんな気持ちになるか想像もつかなかった。

「どうした、怖気ついたか？」

「まさか！ 我が国のパイロットが一流揃いであることを証明してきますよ」

隊長の挑発が気遣いであることは重々承知していたが、今のティナにできることは曖昧な考えを捨てて自分らしさを取り戻す努力をする他なかった。

その後、詳しい移動の日程や細かな説明を受けたティナは、深々と頭を下げて部屋を後にした。もちろん、部屋を出る際は威勢のいい別れの挨拶を忘れなかった。

ティナのいなくなった室内は静まりかえり、外から聞こえる鈴虫の鳴き声だけが永遠と鳴り響く。

隊長はその美しい音色がより聴きとれるように窓を開ける。そして、ポケットから折れ曲がった煙草を取り出して火を灯した。

隊長は最後までティナに優しい言葉をかけようとはしなかった。

最後くらいは何か言つてやるべきだったと若干の後悔を残したが、この機会を逸した以上は別れの時が来ても通り一遍のことしか言うつもりはなかった。それが自分の役割なのだど強く自己暗示をかける。

隊長にとって、歳がふたまわり近く離れているティナは自分の娘と何ら変わりがなかった。無鉄砲で自己主張が強く、思ったことはすぐ口にする勝気な性格、半面人懐っこく隙を見せると抜け目なく甘えてくるころなど、性格まで自分の娘にそっくりだ。

そんな部下が可愛いのは当然である。それでもティナに対して厳しく、また素っ気なく接し続けたのは「軍人として」女パイロットという存在にどう接していいかわからなかったからだ。

一度優しい言葉をかけてしまうと、部下として育てるところか単に愛でるだけになってしま

いそうだった。隊長にとって苦楽を共にした女パイロットたちはそれほど愛おしい存在なのだ。だが、「死なないように」と心配するのは親の仕事であり、「立派に死んでこい」と命ずるのが上官の仕事であると隊長は考えていた。これは不条理などではなく、規律の問題だと自分に言い聞かせる。

あのような娘たちが軍隊という空間に存在するのが正しいことなのだろうか？ そんな疑問すら浮かんでくる。差別意識を持つているわけではないが、息子は戦場に送れても娘だけは戦争に巻き込またくないという隊長の本音が見え隠れしているようだった。

しかし、今や自分の手を離れた彼女たちには、その身を案じてやることだけだ。言葉をかけてやれないのなら、せめて選別でもくれやろうと隊長は思い立つ。

酒は飲めないだろうから何か洒落たものを渡さなきゃならん、と隊長はプレゼントの内容を考えたながらひとり笑みを浮かべていた。

3

約五日間の船旅を終え、某国にて愛機〈モランデル〉の陸揚げと輸送を済ませた頃にはティナが母国を去つてから二週間が経過しようとしていた。

ティナと共に母国から派遣された義勇軍の第一陣は総勢で二〇〇〇名程だ。その内訳は、約四〇機の航空機で構成された一個飛行隊と、陸上部隊が二個大隊相当である。隣国でもない

三〇〇〇キロも離れた地に派遣する義勇軍としては、いささか大規模すぎるくらいである。それだけ、この義勇軍が政治的・軍事的に何らかの意義を持つていることを物語っていたが、当の兵士達にとつては知られざることであり、またどうでもいいことでもあった。

そもそも、前大戦を戦った老齢の将兵を除き、志願した兵士の殆どは実戦経験など持ち合わせていない若手だ。加えて、上官から「良い経験をしてこい」などと尻を叩かれて見送られたものなら、誰だつて義勇軍への参加を研修のように捉えて樂觀的になりがちである。もちろん、ティナも例外ではなかった。

輸送船及び列車による大軍の移動は劣悪な環境の下に行われたが、歳も近く境遇を同じくする仲間が集えば話に花が咲くのは当然の流れだ。それに、ティナは珍しい女パイロットという立場から周囲に持てはやされることも多く、その姿はアイドルさながらだった。

そんな旅路もつい昨日までのことであり、気づけばティナと〈モランデル〉は激戦区から程良く離れた中規模の基地に配属されていた。

義勇軍の受け入れに関する手続きと説明は昨晩のうちに受けていたが、平時だった母国と違いここは内戦中の国である。受け入れの態勢は万全とは言えず、着任から一夜明けた今日とはりあえず待機という命令が下されていた。

目覚めて間もないティナは、晴れ渡る滑走で大きなあくびとともに屈伸をする。長い移動による疲れはまだ色濃く残っているようだった。

ティナの後ろには、同じ軍服を纏った女が付き従っている。

歳も体格も近い二人だが、その容姿は大きく異なっていた。黒髪のティナとは対照的で、女の軍帽からは色素の薄いブロンズヘアがのぞき出ており、パッチリ見開かれた目の下にはそばかすが浮かび上がっている。互いに同じ国の出身ではあるが、女は北部に住む民族の特徴を色濃く受け継いでいるようだった。

女は、だらしなく歩くティナの背中を叩いて声をかける。

「ちょっと、ここも前線には違いないんだから少しは緊張感を持ちなさいよ」

「そうは言っても飛べないんじゃない？ レイラの方こそちょっと気張りすぎじゃない？」

レイラと呼ばれるその女はティナの同期で、同じ隊から義勇軍へ選出された女パイロットの一人だった。

二人の交遊は、軍が女性パイロットを募集し始めた頃に遡る。選抜試験でトップ争いをしたことで関係を持ったのがきっかけだった。その後も、狭き門の戦闘機乗りに選出された二人は、女パイロットということもあり同じ隊に配属され同期として今尚仲を深めているのだ。

ティナの呆けた態度に呆れたレイラは、急に不敵な笑みを浮かべて目を細める。どうやらエンジンがかかったようだ。

「ホント、ティナは飛ぶことしか考えてないのね。戦闘機乗りじゃなくて冒険飛行家か郵便機のパイロットにでもなればよかったんじゃない？」

「嫌よそんな真つ直ぐ飛ぶだけの仕事なんて。レイラの方こそ勤勉なんだから戦闘機なんか乗っていないで輸送機か爆撃機乗りにも転向すれば？ たぶんお似合いよ」

互いに挑発し合っておきながら、その雰囲気は独特の明るさを持っている。こうして遠慮なく憎まれ口を叩き合えるのも、二人の付き合いが長いからこそだ。

そもそも、二人は民間の飛行クラブに属していた経緯があり、元より能力的にも経験的にも優秀なパイロットであることに変わりはない。しかしながら、直観的で持ち前の感覚に頼るティナに対し、レイラは知識と経験則を重視する理論派だ。互いに違うタイプでありながら同じ境遇を得たことで、二人のライバル心は燃え上がった。そして貪欲に互いの良さを学ぼうという姿勢が生まれ、それが二人の絆を醸成する種火になったのだ。

今やコンビとも言うべき二人の応報は日常の一部と化している。

いつものように言葉の報復を食らったレイラは、その高い鼻を鳴らしてより挑発的な目つきになった。

「まあいいわ。ここでやるのは訓練じゃなくて実戦よ。どっちが戦闘機乗りとしてふさわしいかじきにわかるでしょうね。ティナのちゃらんぼらんばな飛び方じゃすぐ火だるまにされてオシマイよ」

「そっちこそ、いつもみたいなお堅い飛び方してたらいいよ。ケツにつかれたらせいぜいティナ様助けてくださいと叫ぶことね！ 心配しなくても三秒で助けてあげるわ」

煽り合いが頂点に達したところで、二人は互いにわき腹を小突いて笑い合う。傍目から見れば、その姿はじゃれあっている友人同士にしか見えなかった。

暇を持て余している二人は、煽り合いも程々に基地の散策を始める。

着任してからまだ半日も経っていない上に、まともな案内を受けていなかったので自主的な見学に乗り出したというわけだ。

当の基地の中は静かなもので、歩きまわってみてもその様子はまったく前線らしからぬものだった。周りから聞いた話によると、敵味方共に現在は兵力の再編成に尽力しているらしく、戦線は半ば休戦状態とのことらしい。偵察機同士の小競り合いこそあるものの、当基地も派手な作戦行動は控えて義勇軍の受け入れとインフラの整備に力を入れているというわけだ。

また周囲にいる人間も現地人ではなく義勇軍として派遣された同郷の人間ばかりだ。配備している機体や装備もティナの母国から持ち込まれたものが殆どで、もはや内戦ではなく明らかな代理戦争と言って差し支えない様相だった。

しかし、ティナにとつてこの環境はいささか期待外れなものであった。なぜなら、今見ている風景が母国にいたころと何ら変わりがなかった。気候や植生の違いは若干あるものの、母国色に染められた基地の中には外国にいるという心地は一切しない。船や汽車で移動していたときの方がよっぽど刺激的だったと今になって思う。

そんな環境にあっても、散策を続けるティナは目ざとく興味の示すものを発見した。

お目当てのものは、滑走路脇に併設された突貫作りの木造ハンガーに駐機されていた。ティナは目を輝かせながらレイラの肩をゆする。

「見てよ。あれ〈フェスカ〉じゃない？ 絶対そうよ！」

ティナの指差す先には、一機の単発戦闘機が鎮座している。

濃いグレーに迷彩されたその機体は、液冷エンジン特有の細くに引き締まった鼻先を持っていた。しかし、外見上のスマートさに反して〈モランデル〉よりひと回り大きいようである。また、主脚は引き込み式になっており、機銃のひとつはエンジンの同軸上、つまりプロペラの中心から弾が発射できるように配置された『モーターカノン』が採用されている。外観からわかる特徴だけで、いかにその機体が進歩的であるか容易に想像がついた。

レイラは肩にかかるティナの手を振り払ないながら冷静に答える。

「確かに本物の〈フェスカ〉みたいね。私も初めて見るわ。だけどなんで敵の最新兵器がこんなところにあるのかしら」

「義勇軍のものじゃなさそうだし、内戦が始まる前にこの国が買ったか譲渡でもされたんじゃない？ そうでなければ鹵獲したとか、機体と共に敵のパイロットが亡命してきたとか」

そもそも〈フェスカ〉は、ティナの母国と敵対する反政府側の航空先進国が開発した主力戦闘機だった。つまり、現政府側に属するティナたちにとって言わば敵の主要兵器である。

二人はそのままハンガーの中に入り、まじまじと〈フェスカ〉を眺め始める。

近づいてみてもその洗練さは色あせず、部品ひとつひとつの細部からは技術力の高さがはつきりとにじみ出ていた。

ティナは機首に据えられたプロペラを撫でながら感嘆とした様子で呟く。

「綺麗な機体……私の〈モランデル〉より高く飛べるんだろうなあ」

「二〇〇〇馬力もない〈モランデル〉と比べたらこのコが可哀そうよ。まあ、この液冷エンジンがマトモに動くかわからないけど、公称スペックで見たら三割くらい負けてるんじゃない？」

「ドッグファイトでなら負ける気がしないけどね」

負け惜しみを言いながら、ティナは〈フェスカ〉の主翼を回り込んで機体の側面に移動する。ボディは綺麗に磨きあげられていたが、ところどころ被弾して修復した個所が見てとれた。それだけで実戦を経験した機体であることがわかる。

ふとコックピットの後ろに目をやると、所属国を表す青十字のマークが丁寧に描かれている。澄んだ空色をしているそのマークは、機体の濃い迷彩がコントラストを強調して綺麗に浮かび上がっていた。

ティナはそのマークを指でなぞってみる。先ほどからペットでも扱うかのようにベタベタと機体に触れているが、ティナは琴線に触れるものがあると何でも触りたくなるクセがあるのだ。

「この国の識別章がペイントされているから、味方の機体みたいね。誰が乗ってるんだろう？」

「そいつは俺のだ」

突如発せられた第三者の声に、ティナとレイラは驚かされた。二人揃って振り向いてみると、ハンガーの入口に一人の男がたたずんでいる。

長身でガタイのいいその男は、濃く青味がかった軍服を纏っていた。顔は若々しく端正だが、鋭く細められた目は人を寄せ付けない類の雰囲気を持っている。

男は、二人の顔を見て少しだけ動揺の色を示した。

「女……そうか、お前たちが例の義勇軍のパイロットか。誰の許可を得てここに来た」

威圧的な態度を受けて固まるティナに対し、先に反応を示したのはレイラの方だった。

レイラは目ざとくも男の襟についた階級章を確認し、男の階級が自分と同じであることを承知した上であえて偉そうに振る舞った。

「あらごめんさい。配属されて間もないから自主的に基地の見学をしたのよ。これから一緒に戦うことになるんだから、何でも知っておかなきゃいけないでしょ？」

「ちよつとレイラつたら……」

たとえ国が違えど、軍の階級序列というものは大方通用するものだとしてレイラは考えていた。であれば、自分がよそ者であろうと同じ階級の者にヘコヘコする必要はないという理屈だ。

ティナの方はというと、そんなレイラの考えなどわかるはずもなく面倒事にならないよう祈りながら場を見守ることしかできなかった。

男はレイラの挑発に乗ることなく鋭い声で話を続ける。

「いくら義勇軍とはいえ、我が軍の装備を何から何まで見せるわけにはいかない。それくらいのことはお前たちにもわかるだろう。今日のところは見逃してやるからとつと兵舎へ帰れ」
「それもそうね。いい機体だったからついつい見入っちゃったのよ。アナタと一緒に飛べる日が待ち遠しいわ」

そう言い放つと、レイラはティナに目配せをしてそのままハンガーを後にした。レイラも引き際だけはしっかりとわきまえていたようで、ティナは胸を撫で下ろす。

ハンガーから少し離れたところで、ティナは滑走路脇を堂々と歩くレイラに対して心配そうに声をかける。

「ちよつとレイラ、ここは母国じゃないのよ。強気なのはいいけど問題起こさないでよね」

「ティナは胸もないけど度胸もないのね。あんな男、大したことないわよ」

「別に胸はないわけじゃないし、無謀をするための度胸なんて別にいらさないから」

ティナにしては珍しく普段の憎まれ口を喉元で抑え、必要以上に背伸びをするレイラに釘を刺す努力をしていた。

二人は互いに自己主張の強い女であるが、本能に忠実なティナと違ってレイラのそれは自尊心から来ている節があった。つまり必要以上にプライドが高いのだ。

ティナはそんなレイラのことを余計なお世話とわかりつつも心配していた。

「レイラはすぐそうやって男女を引き合いに出すんだから。自分でも言ってたけど、あの人と

はあくまでも仲間なんだからちよつとは仲よくする努力もしないと」

「フン、なんだか偉そうなヤツだったし慣れ合うなんてお断りよ」

「偉そう」という単語を聞いて、ティナは少し引つかかるものを感じた。

確かに、さっきの男は高圧的な態度をとっていたが、それは警告のためであって自分の立場を棚に上げている様子なかった。むしろ、やろうと思えば二人が義勇軍であることや女である部分について攻撃することができたはずだ。そのようなときに一番多い言い草が「これだから女は」理論である。ティナは今までの経験からそれをよく心得ていた。

「あの人、別に悪そうな人じゃなかったけどなあ」

「どこ見たのよ！ 目つきから性格の悪さがにじみ出てたじゃない」

ティナはため息をつけてレイラをたしなめることを断念した。

他人に噛みつく愛犬の調教に失敗したようなやるせない気分には陥ったが、とりあえず頭の中を切り替えて先の男のことを思い出してみる。

美しい機体を持つ端正な男——ティナがああ男に興味を抱くとしたら、どんな操縦をするかという一点に尽きた。

機体の被弾痕から男が実戦を経験しているであろうことは伺い知れる。直感的に腕のあるパイロットだと確信していたが、その腕とはティナやレイラのような操縦技術だけに裏付けられたものではなかった。実戦を経験した者だけが得られる「凄み」こそが、男の持つ実力の根拠

になっっているのではないかとティナは薄々感じていた。

生真面目で厳しそうだが鼻にかけた態度をとらない男。ティナの頭の中には、母国で別れた隊長の顔が浮かんでいた。どことなく雰囲気似ていたもので、もしかしたら隊長も昔はあんな人だったのかなと想像が膨らむ。

ティナは思い出したかのようにポケットからあるものを取り出した。

それは、別れ際に隊長から饒別で受け取ったコンパスだった。軍用品ではなく装飾に凝った珍しい小型のコンパスだ。

コンパスは飛行機乗りとしては欠かせない装備品である。しかし、わざわざ機内に持ち込まなくとも機体の計器盤に専用のもので搭載されているのが普通だ。言わば、お守りの意味合いを兼ねてこれを渡してきたのだろう。

隊長は別れ際に体長は素っ気ない態度でこれを渡してきたが、小物売り場を回ってこれを選んでいる姿を想像してみると微笑まじくはいらなかった。

同時に、指揮所で怒られたときに見せた隊長のはにかみ顔を思い出す。

〈フエスカ〉に乗る男——あの男も隊長みたいに笑うことがあるのだろうか。

不意に繋がった二人の男は共に戦場での経験を背負っている。ティナは隊長の忠告を思い出して複雑な気分になった。

気を紛らわせるために、あの男を笑わせるにはどんなジョークを用意すればいいだろうかと

ティナは面白がって考えてみる。そのまま頭を抱えて歩くティナは、監視塔の支柱に向けて吸い寄せられるかのように歩んでいた。

次の瞬間には、強烈な衝撃と共にレイラを一生分笑わせるだけの体を張ったギャグが頭のゴブと一緒に生まれていた。

4

散策を終えたティナとレイラは、適当に昼食を済ましたところで急ぎよ指揮所に呼び出された。指揮所とは言ってもその実態は退避壕付きの木造ポロ屋で、通信設備もまともに配備されていない急ごしらえの施設だ。

そんなポロ指揮所のミーティングルームを訪れたティナとレイラを待っていたのは、当基地に所属するほぼ全てのパイロット達と基地司令含む数人の高級将校だった。パイロットの総勢は三〇名足らずで、義勇軍が半数以上を占めている。基地の規模に反してパイロットの数があまりに少ないのは、指揮所のポロさも含めて慢性的な資源・人員不足の表れでもあった。

全員が集まったところで、おずおずと現れた基地司令が場を仕切る。しかしながら、若さを残す顔つきでオドオドと喋るその姿は司令としての貫禄に欠けていた。恐らく、足りない将校を補うために急ぎよ養成されたクチなのだろう。不安要素ばかり目につくティナはいい加減辟易していた。

だが、いくら基地司令が頼りなからうと彼も一介の司令官である。基地司令がボソボソと話すその内容は、ティナとレイラの運命を決定づける「編成と配属」に関してであった。

ティナとレイラは同じ「モランデル」に搭乗しているので、同一機種をまとめた第四中隊のうち最低序列である第三小隊に配属されることとなった。

第三小隊の内訳は、レイラが小隊長を担当し寮機にティナがつく形だ。当基地では航空隊の規模があまりに小さいため、二機構成の小隊を最小単位にしている。また、装備の偏りや出身国の違いなどから階級差も多少無視され、結果的に同じ小隊に詰め込まれたティナとレイラは同階級にも関わらず方や小隊長、方や寮機という編成を余儀なくされていた。

「なんで私がレイラの尻拭いなのかよ！」

ミーティングを終え、部屋を後にしたとこでティナは屈辱とも言える編成の不满をレイラにぶつけていた。

対して、えらく満足した様子のレイラはその高い鼻を鳴らして堂々とティナの前を歩いている。

「あの基地司令閣下、頼りなさそうに見えたけど私の実力はしっかり把握していたようね。ティナはせいぜい足を引っ張らないように私の後ろを飛んでなさい」

何を言っても負け惜しみにしかならないティナは、「ぐぬぬ」と歯を食いしばりながらレイラの挑発を聞き流す他なかった。

階級も実績もほぼ同等の二人ではあるが、二人だけで編隊を組む以上は優劣がつくのは当然のことだ。ティナにしてみれば、寮機に選ばれたのは運が悪かっただけと理解してはいるものの、いつもの調子でレイラに煽られては我慢の限界だった。

溜まりに溜まった不満をレイラにぶつけようとしたその瞬間、ティナの怒りを遮るように突如後ろから声をかけられる。

「お前達。自信があるのは結構だが、ここは飛行クラブじゃない。あまり調子に乗るな」

聞き覚えのある鋭い声が背中に刺さる。ティナの後ろに立っていたのは、昨日にハンガーで出会った〈フェスカ〉のパイロットだった。

「あら、誰かと思えばベッカー中尉じゃありませんか。それとも中隊長殿と言った方がいいかしら？」

先のミーティングで編成を言い渡された際、男の名がベッカーであるということを知り、二人は初めて知った。加えて、ベッカーは第四中隊の中隊長を命じられていたので、ティナとレイラはベッカーの指揮下に入る形となっている。

そんな事情もあつてか、レイラはベッカーに対してはえらく敵対心を燃やしているようだった。初対面で注意されたことも気に食わなかったようだが、どちらかと言えば実戦を積んだ男のパイロットに負けたくないという虚勢がその態度を生んでいるように思えた。

ティナはそんなレイラのプライドの高さに呆れつつも、二人の火花が大火事に発展しないよ

う慎重に場を見守る。

「俺の呼び方は何でも構わない。はつきり言うが、受け入れて間もないお前達を急ぎよ編成に組み込んだのは敵の大規模な作戦行動が近いからだ。正直言つて、お前たちの実力を見る前に小隊として独立させて実戦に出すのはこちらとしても不本意だ」

「あなたが不本意でも、基地司令閣下の判断があつてウチの小隊が編成されたわけでしょ？」

釘を刺しに来たなら心配しなくても結構。戦果欲しさに暴走するような真似をするつもりはないわ」

「ならいいが……くれぐれも独断専行のないように。あくまで指揮官は俺だ」

それを聞いたレイラは、悪ふざけのように「イエス・サー」と叫び、呆れたベッカーは何も言わずにその場を去ってしまった。

度重なるレイラの所業にティナはため息をつく他なかった。

「レイラ、ちょっとツンケンしすぎじゃない？ 階級は同じかもしれないけど、ベッカー中尉の言つた通り編成上じゃ私たちは彼の隷下にあるのよ。あんまり突っかかっていると問題になるわよ」

「あら、ティナも編成上じゃ私の隷下にあるんじゃないかって？ 私が小隊長よ。少しは敬いな

さじよ」

その一言でレイラに対する怒りを思い出したティナは、軽く回し蹴りを決めてから綺麗に

セツトされた頭を鷲掴みにしてグシャグシャにしてやった。

翌日、ベツカーの言葉通り基地は慌ただしく動き始めた。

パイロット達は早朝のうちからミーティングルームに集められ、眠気が一気に醒める話を聞かされることになる。

昨日に増して落ち着きのない基地司令の口から告げられたのは、敵の攻勢が近いという旨の話だった。具体的には、戦力増強を完了した敵が近いうちに大規模な解放作戦を全戦域で一斉に仕掛けてくるというのだ。

何も事情を知らないティナとレイラにとっては多少面食らう話であったが、当基地に元から所属しているパイロット達にとっては当然の事実のようだった。

そもそも前線に近いこの基地が平穩だったのも、敵味方共に泥沼の消耗戦を避けて攻勢を控えていたからである。しかし、パワーバランスが崩れたとなれば話は別だ。今や前線に展開する敵航空兵力——その大部分がこちらと同じく義勇軍で構成されたもの——は、我が方の二倍とも言われ、その差は広がりつつあるとのことだった。

現状の不利をあらためて自覚した一同は黙り込んで目線を落とす。

今までの方針では、数に劣る当基地が攻勢を受けた際は、防空に専念することが決定されていた。戦力差があるからこそ、無駄な攻勢を避けて有利な形で消耗戦を戦う必要があるという

思惑があつてのことだ。

しかしながら、続けて聞かされた話は一転して皆を驚愕させた。

なんと、明朝に敵の不意をつく大奇襲を仕掛けるというのだ。

基地司令部は、当基地が消極姿勢をとっていることを敵が把握しているからこそ、敵は守りを薄くしていると判断していた。であれば、攻勢を受ける前に奇襲を敢行して敵戦力を削ぎ落とすというのだ。

それが冒険的な作戦であることは誰もが自覚していた。

出撃は日の出と同時に往われ、投入戦力は保有機のおよそ八割という一大爆撃作戦だ。

だが、高揚するティナとレイラの気持ちとは裏腹に、二人の所属する第四中隊は基地に残留して防空任務を担当することが言い渡された。着任して間もないパイロットが多いという事情があつてのことだ。

有体には言えば留守番だが、ティナとレイラはそんな決定を悔やむ間もなくミーティングを終えた直後から空を飛び回ることになる。

敵の攻勢を危惧して警戒体勢に移行した基地は、絶え間ない哨戒飛行を開始したのだ。

慌ただしく日中の哨戒飛行を終えたティナとレイラは、日が落ちた今もスクランブル発進が可能なよう詰所で待機を命じられていた。

「あーあ。基地防空なんてホントくだらないわ」

薄汚い簡易ベットに横たわるレイラは呼吸をする度に不満を漏らす。

対するティナは長時間の単調なフライトで疲弊し、レイラに突っ込む気力も残っていないらしく硬い枕に顔をうずめていた。

「もうあんなフライトしたくない……」

ティナとレイラが午後に行った哨戒飛行は、敵の攻勢が近いという理由だけで行われた形だけのものだ。結局、数時間も基地上空を飛び回った挙句敵の姿を見ることはなかった。

本番は敵の逆襲が予想される翌日以降である。しかしながら、爆撃作戦に加われない二人は、疎外感を感じてどこか煮え切らない様子だった。

特に、プライドの高いレイラが文句を言わないハズがなかった。その頻度はもはや機関銃た。「私が爆撃に参加すれば大活躍だったのに」

いい加減、無視もできなくなったティナは気だるそうに顔を上げてレイラに向き直る。

「爆撃機のエスコートも楽じゃないでしょ。まあ先遣の制空部隊——切り込み隊長になれば話は別だけどね」

「私はそっこのがしたいのよ。そっこの！」

ティナとレイラは、石油ランプに照らされた薄明かりの下で顔を寄せ合う。

夜間であっても待機命令に変わりはなかったが、夜間の哨戒飛行は見合わせていた。夜間出撃は相応の装備がないと効果も挙がらなければ事故率も高くなるため、一般的な戦術として

定着していないのだ。もちろん敵も立場は同じである。

そのため、殆どのパイロットは翌日の出撃に備えるため防空隊も含めて詰所で仮眠をとるようになっていた。ティナとレイラも例外ではない。

ティナは翌日から待ち受けるであろう交戦を想像して寝付くことができなかった。しかし、普段通りレイラと話をしていると不思議と気持ち落ち着くのであった。

「それにしても、何だか試験前のことを思い出すわね」

突然の話題転換にレイラはきよんとする。

「試験って、訓練時代の？」

「そうそう。あの時はどっちが戦闘機乗りになれるか、なんて前の日の晩に言い争ってたわよね。こんな風にベットの中で」

「懐かしいわね。結局、私達二人がトップで両方とも念願叶ったわけだけど」

レイラの言い草に目聡く反応したティナは頬を膨らませる。

「あの時トップだったのは私でしょ。私が教官に撃墜判定を出したときの記録は七五秒。レイラは八九秒だったじゃない」

「でもティナは被弾判定を貰ってるじゃない。私は無傷だったわよ。同率トップか私の方が技術点が上ね」

訓練時代から続く「どっちがトップだったか論議」を思い出した二人は、顔を見合わせてク

スクスと笑い合う。

そんな空気にあてられたレイラは、珍しく融和な顔を浮かべる。

「ねえティナ。私が小隊長になったこと不満に思ってる？」

その問いかけはティナにとって少し意外なものだった。いつも自信満々で高飛車に振る舞っているレイラがそんなことを気にしていたとは思ってもよらなかったからだ。

「そうね……少し悔しいけど、ただの役割分担じゃない。レイラが先走って私がフォローするなんてのはいつものことよ。たぶん性に合ってる」

「あら、随分素直なのね。正直、ティナはずっと怒ってると思ってた」

「怒るものにも、ここじゃ私たちは仲間なんだから対抗心なんてのは二の次よ。明日からはしっかりその重いお尻を守ってあげるから安心して暴れなさい」

話を聞き終えたレイラは、ティナの軽口に対抗することもなく「ありがとう」と一言だけ放つてベットに潜り込んでしまった。

そんな様子を見たティナは、レイラの心境を察する。

レイラも不安なのだ。初めての実戦が迫っているとなれば当然のことである。突然ティナに続けるような態度をとったのはそのためだろう。

ティナは、ここにきてやっとレイラと気持ちを共有できた心地がした。

正直に言えば、基地に着任してからのレイラの自信過剰な態度は、心の余裕の無さからきて

いることは明らかだった。一種の自己暗示だと思うが、裏返せばそれは信念の強さとも言える。レイラの弱みにも強みにもなる要素だ。

普段から傍にいるティナにしてみれば、そんなレイラを常に良い方向に焚きつけてやるべきだと常々思っている。しかし、エンジンのかかったレイラをコントロールすることはもっぱら不可能に近かった。

結局、ティナにできることといえば常に傍らにいながらレイラをフォローする機会を伺うことだけだ。そういう意味で、先ほどの会話は良い結果を生んだように思えた。

もちろん、ティナの方もレイラを抱擁できるほど自分ができた人間でないことは十分自覚している。

飛ぶこと以外には無頓着で、さしたる芯も持たないティナを引っ張ってくれたのはレイラの方だ。レイラがいなければ戦闘機乗りを目指そうとも思わなかっただろうし、原隊で一二を争う空戦技術を磨こうとも思わなかったかもしれない。

競うものや目指すものがあるからこそ、ティナは今の居場所と腕を得ることができたのだ。そういう意味で、レイラには心いいつも感謝していた。

つまるところ、ティナとレイラは二人揃って一人前のペアであって、どっちが優れているという話ではない。性格や特質が異なるからこそ、二人揃えば互いに補い相乗することができる存在なのだ。

そんな考えを、恐らくレイラも抱いてくれているであろうとティナは薄々感じていた。だからこそ、レイラはペアを組むあたって互いに遺恨がないことをわざわざ確かめてきたのだ。

訓練基地時代ではティナとレイラがペアを組めば教官であろうと敵う者はいなかった。今宵の会話は、そんな無敵のペアを再現するための儀式だったのだ。

二人はいつの間にかベット越しに手を取り合う。

二つの小さな手は固く結ばれ、一つの熱き闘志がそこに生まれようとしていた。

5

『第三小隊は高度二〇〇〇を維持。我が機の後方五〇〇メートルに続け』

相変わらずの鋭いベッカーの声がノイズと共に無線機より発せられる。

ティナはスロットルを調整し、編隊が乱れないよう注意を払いながら周囲を見渡して索敵を続けていた。

昨日に引き続き、ティナ含む第四中隊は早朝から基地上空で哨戒飛行を行っていた。

今飛んでいるペアは、隊長機含む第一小隊「ベッカー隊」の〈フェスカ〉が二機と、ティナとレイラが搭乗する第三小隊「レイラ隊」の〈モラन्दル〉が二機となっており、全四機構成で編隊を組んでいる。

日の出から一時間近く経ち、十分に明るくなった空は晴れ渡っている。風もなく、雲は殆ど見当たらないため航空作戦を行うにはもってこいの日和だ。

当然ながら、前日より計画されていた爆撃作戦は予定通り敢行された。

爆撃隊は日の出と同時に全て出撃し、今や基地内に残存するのは防空任務を担当する第四中隊と補助機だけだ。

敵が来襲する可能性は低いと考えられていたが、稼働機の少ない今空襲を受けてしまうと基地施設が甚大な被害を被るのは明らかだ。突貫作りの当基地は施設の偽装も十分ではなく、ハンガーや露出している燃料タンクなどを爆撃されれば今後の作戦行動に多大な障害が出てしまう。

そういう意味でも、少数とは言え基地防空任務は重要な役割であると言えた。

ティナは操縦桿を固く握り締め、レイラの搭乗する三番機の〈モラन्दル〉の斜め後方に続く。早朝からの出撃にも関わらず眠気はなく、呼吸は落ち着いている。高山病の心配もないベストコンディションだ。

愛機の〈モラन्दル〉も昨日に引き続き機嫌が良いらしく、相変わらずの快調な唸りを挙げている。先日の長距離輸送前に行ったオーバーホール並みの大整備が効いているようだった。

心身・愛機共に好調なのはレイラも同じようで、堂々と飛ぶレイラ機は同じ〈モラन्दル〉でありながら、まるで別種の機体であるかのように感じられた。

互いの調子に満足したティナは腕時計で飛行時間を確認する。離陸から一時間半が経とうしており、今頃は味方爆撃隊が敵基地上空で暴れている頃合いである。逆に言えば、もし敵が日の出と同時に攻撃していればそろそろ当基地に來襲する時間帯でもあった。

不思議なことに、ティナはこれから敵がやってくるような予感がしていた。

ティナの言葉で言えば、「空が教えてくれる」という感覚だろうか。訓練時代にも、何故か敵対機がどこから來襲してくるのか、なんとなく察知できる時があった。勿論、味方機にそんな予言じみたことを伝えるわけにもいかないので口に出したことはないが、その感覚が外れたことは一度もなかった。

先ほどからティナは敵の「におい」がする空をじっと見つめ続けている。敵飛行場のある方角から少し東にそれた太陽に近い位置だ。

すると、一〇分も経たないうちに星のように瞬く小さな光点を発見する。一瞬しか見えなかったため、気のせいのようにも思えたが、しばらく観察していると光点は複数に増え、ハッキリと視認できるようになってきた。

ティナは送信機をオンにし、大声で叫ぶ。

『こちら四番機。正体不明機、方位三時方向！ 高度二〇〇〇から二〇〇〇！』

ティナの報告に驚いたのか、中隊長であるベツカーは、「なに」と一言放つて黙り込んでしまった。今頃は熱心に東の空を見つめて正体不明機を探しているのだろう。

そうこうしているうちに、瞬く光点は糸クズのような横向きの黒線に変化し、何らかの編隊であることが明確になってきた。

『一番機、正体不明機を確認。全機、方位三時方向へ変進。高度二五〇〇に上昇。全速で確認に向かう』

各機は無線で軽快な返事を告げると、それぞれ転進して速度を増した。

ベツカーは「確認に向かう」と言ったが、全速で高度を上げて近づく判断は戦闘になる前提の行動に他ならない。正体不明機が渡り鳥の群れや、先の出撃で故障・損傷して引き返してきた味方機の編隊である可能性もあるが、綺麗な編隊を組んで太陽の方向から侵入してくる物体は十中八九敵だと判断したのだろう。

心拍数の上昇を自覚したティナは、深呼吸をして額に浮かぶ汗を拭う。その生理現象は緊張によるものでなく、興奮からきていた。

レイラとの絆を再確認したティナの前に恐れはない。レイラと二人で向かえば必ず良い結果が出せると確信しているからこそ高揚を感じているのだ。

気がつくと、正体不明機との距離が近づき、その編隊が上下に分かれた二つのグループで構成されていることが明らかになる。

『十二時の方向、敵爆撃機四機、高度一五〇〇！ 敵戦闘機二機、高度二〇〇〇！』

突如、受信機よりから発せられたベツカーの大声が機内に轟く。

ティナには正面に見える影が敵か味方かわからなかったが、ベッカーはその小さなシルエツトから機種を判別して敵影だと確信したのでろう。実戦経験があつてこそその判断だった。

敵は総勢六機。小規模だが、爆弾を搭載した双発の軽爆撃機を中心とするその編成は、明かな攻勢の意思を持って作られたものだった。爆撃隊は火力を集中するために周密しており、護衛を担当する戦闘機隊は爆撃隊の五〇〇メートル上空の位置についている。爆撃機が襲われた際、降下して逆襲できるそのポジション取りはセオリー通りだ。

再びベッカーから通信が入る。

『第一小隊は爆撃機を迎撃する。第三小隊は高度二五〇〇で待機。必要なら支援を要請する』

第三小隊は待機——つまり、ティナとレイラに「待て」と言いたいらしい。

『こちら三番機。待機ですって？ 第三小隊は戦闘機への攻撃を進言します』

ベッカーに続けて無線に割り込んで来たのはレイラだった。

確かに、レイラの言うとおりこの状況において「待機」を命じられるのは不本意だ。セオリーで考えれば、全機全力で爆撃機を叩くか、ベッカー隊とレイラ隊の二手に分かれてそれぞれ爆撃機と戦闘機を相手にするのが普通だ。数的優位が物を言う空戦において、わざわざ空中で戦力を温存する意味はない。

生意気だとはわかつていたが、ティナはレイラの意見に加勢する。

「こちら四番機、三番機の意見具申に同意します。攻撃の許可を」

『……』

受信機からはノイズしか聞こえてこなかった。

ベッカーが沈黙を守る間にも、敵機との距離は着実に近づきつつある。目算で三〇〇〇メートルほど離れているが、時速三〇〇キロで進む戦闘機同士が向かい合えば一五秒ですれ違う距離だ。

『小隊長！』

急かすようなレイラの叫び声がかきつけかけになった。

『了解した。第三小隊の敵戦闘機攻撃を許可する。だが、深追いはするな！』

ベッカーの決断が下されると共に、全機が一斉に戦闘機動に突入する。

ベッカー隊の二機の〈フェスカ〉は素早く反転し、急降下で敵爆撃隊に襲いかかる。反転急降下からの直上攻撃は敵機の後方機銃を浴びにくい反面、照準がつけにくく衝突の危険もある高度な技だ。

時速五〇〇キロ以上に増速した二機の〈フェスカ〉は、絶妙なタイミングで敵の爆撃隊とすれ違い、ありつたけの機銃を浴びせる。その姿は、さながら獲物に食らいつく肉食の大型鳥類のようだ。

〈フェスカ〉の武装は、モーターカノンの十八ミリ機関砲と、機首上部に小口径の七・五ミリ機銃を装備している。機首に集中された火力は命中精度が高いと評判で、特にエンジンの軸線

上から大口径の機関砲弾を発射できるモーターカノンが各国に恐れられていた。

瞬間に〈フェスカ〉二機が攻撃を終えると、敵爆撃機のうち一機が片側のエンジンから黒煙を上げて爆弾を投棄していた。

見事な攻撃に関心している暇もなく、レイラ隊も敵戦闘機への攻撃に移る。

敵戦闘機隊は、あくまで爆撃隊を護衛する任務を帯びているので、その狙いは爆撃機に襲いかかったベッカー隊の妨害にある。有利なポジションにいるレイラ隊は、敵戦闘機の尻を追ってベッカー隊を支援してやればいい。

レイラ機は敵戦闘機が降下するタイミングを見計らい、機首を下げて敵を追いかけて始めた。ティナ機もそれに続いて獲物を見定める。

徐々に敵戦闘機のフォルムが浮かび上がってくる。スマートだが飢えた獣のような力強さで舞うその機体は、ベッカー機と同型の〈フェスカ〉のようだった。青空に溶け込むような白基調に迷彩されたその機体は、暗い色合いのベッカー機とは対照的だ。

そんな〈白いフェスカ〉の美しさに見とれている間もなく、互いの距離はどんどん近づいてくる。「必中」の距離はすぐそこへと迫っていた。

先に攻撃を行うのは前方を行くレイラだ。ここでレイラに先を越されても、ティナは悔しいなどとは思わなかった。この初戦果は二人の戦果だ。

仮にレイラがここで敵を撃墜し、一方でティナが戦果を挙げられなかったとすれば、きっと

レイラは嫌みたっぷりな口調でティナに自慢してくることだろう。だけどそれでいい。ティナはそんな鼻高々なレイラの相手を嫌々しながら笑い合えればそれでもいいと思っていた。それが二人の変わりぬ関係だ。

ティナはレイラ機を見守り、固唾を飲む。

しかし、次の瞬間ふと違和感を感じた。

——なぜ敵は回避行動を取らないのだろうか。

ティナは敵戦闘機隊の一連の機動を観察していたが、その動きは決して悪くないと思っていた。むしろ腕の良い部類だ。だからこそ、目の前の獲物に興奮して後ろに気が回らなくなっているということは考えにくいように思えた。〈白いフェスカ〉は、あくまで冷静にベッカー隊を狙うそぶりを見せ続けている。考えれば考えるほど不自然な光景だ。

ティナの興奮は一気に冷め、悪寒が全身を覆う。

そんなティナの不安をよそに、レイラ機は〈白いフェスカ〉の後ろにびったりと張り付いていた。あまりに理想的すぎる攻撃位置だ。

そんなチャンスを逃すはずもなく、レイラ機はここぞとばかりに機銃を斉射する。

しかし、銃口から放たれた無数の曳光が〈白いフェスカ〉を捉えることはなかった。

〈白いフェスカ〉はレイラの射撃を予見していたかのように、バレルロール——螺旋機動

——で紙一重の回避を行ったのだ。その絶妙なタイミングと淀みない機動には息を飲まされる。

もちろん、レイラは諦めることなく敵機に食い下がり、敵機に続いて華麗なバレルロールをきめた。軽快な〈モランデル〉はドッグファイトを得意としているので、冷静に考えてみても分のある勝負だ。

それでも尚、ティナの胸の中で鳴り続ける警鐘は止まなかった。ティナは、敵の底知れぬ実力に臆しているのかもしれないと思った。

実戦経験は少なくとも飛行経験が長いティナにとつて、目の前で飛ぶパイロットの実力を図ることは容易だ。そして、先に見せた回避運動から〈白いフェスカ〉の持つ飛行技術はティナやレイラのそれを大きく凌駕していることは明らかだった。

更に言えば、ティナと近い実力を持つレイラもそれを自覚できたはずだ。なのにレイラが追い縋ろうとするのは、目の前の獲物を逃したくないという焦りよりも、持ち前の対抗心が燃え上がってしまったからに他ならない。

考えすぎなのだろうか。ティナは不安をぬぐい去ることができなかったが、今のレイラを止める理由も思い当たらなかった。

気持ちに整理はつかなくとも、時は進み状況は推移し続ける。

そしてターニングポイントは訪れた。

ループの頂点——互いに速度を失い、降下姿勢に入るポイントで〈白いフェスカ〉は突如視界から消え失せる。

錯覚などではない。ティナは直感的にその機動を推察する。

〈白いフェスカ〉は、バレルロールの頂点で機体を垂直に立てることにより揚力を消失させ、失速状態に入り凄まじい早さで旋回を行ったのだ。

華麗な螺旋機動から不意に落ち込むその動きは、あたかも獲物を誘い込む蛇を彷彿とさせる。

レイラはその白蛇の幻惑に誘い込まれ、敵機を見失ったのだ。

「レイラー！」

ティナはとっさに叫んだが、送信機のスイッチは下がったまままだ。その悲痛な叫びは、誰に届くこともなくエンジン音にかき消される。

不安が現実になった瞬間だった。これからレイラの身に起こることに、ティナは干渉することができない。空の中にあるパイロットから見れば小さな隔たりも、ティナを傍観者として縛り付けるには十分だった。

ティナは全てを見届ける。

小さな旋回半径を得た〈白いフェスカ〉はみるみるうちにレイラ機に機首を向けた。

機体同士がぶつかりそうになるほどの距離で二機は交錯する。わずか一〇メートル程の差で後ろをとられたレイラは、すれ違いざまにエンジンから胴体にかけてありったけの斉射を浴びる。

〈白いフェスカ〉から放たれる曳光弾の軌跡は、全てレイラ機に吸い込まれた。機関砲から

放たれる焼夷弾はエンジンを発火させ、徹甲弾は主翼を粉碎する。無数に放たれる小口径の機銃弾はコックピットに降り注ぎ、風防を穴だらけにしていた。

そんな光景も一瞬のできごとであり、火の手の回った燃料がそのエネルギーを衝撃に変換するのに大した時間はかからなかった。

大きな火だるまは一瞬のうちに花火となり、レイラ機は跡形もなく四散する。

飛び散った〈モランデル〉の主翼の一端が、火の粉と共にティナ機の横を通過する。くるくると回りながら落ちる複数枚に分裂した主翼は、あたかも舞い落ちる青い花びらのようであった。

6

レイラの遺体を全て回収するためには、手空きの整備員十数人を要して二日かかった。

機体の爆発に巻き込まれた遺体は原形をとどめおらず、一見しただけでは人体の一部と判別することができない「物体」が集まっただけのものだ。

しかしながら、レイラは遺体が回収できただけマシだった。戦況の激変に伴い、増え続ける被撃墜機の多くは前線や敵勢力圏内で墜落しており、遺体の回収どこか生死の確認すら困難なのが現状だ。

そんな事情もあり、戦死者の葬儀は非常に簡素にならざるを得なかった。

日中は敵の襲撃と味方の出撃が忙しく行われているので、その日に戦死した兵士の葬儀は日没を待って行われる。

レイラが撃墜されてから今日までの二日間はとりわけ激しい戦闘が多く、今宵も遺体の回収が終わったレイラのもと合わせて三人分の棺が鎮座していた。

レイラが空に散ってからというもの、ティナは今日まで到って冷静に過ごしてきた。

あの日、ティナはレイラを撃墜した〈白いフェスカ〉をがむしゃらに追おうともせず、そのまま一旦離脱してベッカー隊のカバーに回った。その堅実な攻めにと守りには敵も手を出しにくかったらしく、数回の反復攻撃を受けた敵爆撃隊はエンジンから黒煙を吐きながら爆弾を投棄して逃げ出していった。

その間、ティナの感情は真っ白だった。ティナは味方機一機を失ったという状況に対して、ベストな行動を取ったにすぎない。それは知識とカンによるものであり、そこに感情は介在していなかった。

帰還後もレイラの非撃墜報告を含めたミーティングを坦々と行い、それ以外に何を言うこともなく次の出撃の準備に取り掛かった。

午後の哨戒出撃では再び敵の爆撃編隊と遭遇し、ティナはそこで初めての撃墜を記録する。

軽快な機体が繰り出される素直で無駄のないティナの機動は、敵機にとって一度低空で食いつかれたら振り切ることのできない悪魔のような動きに見えたことだろう。

ティナの操る〈モランデル〉が敵機まで数十メートルの距離まで近づくと、そのシルエットは照準器いっぱいに映るようになる。そのまま敵が逃げるであろう位置に機銃をばら撒いてやれば、敵は自然とその射線上に吸い込まれる。

レイラの時のように爆発四散し、舞い散る敵機の残骸を見ながらティナが考えることはひとつだけだった

——どうしてレイラが死んだのに悲しくならないんだろう。

ティナのレイラに対する感情はその疑問たったひとつだけだった。訓練時代に事故で同期が死んだ時は素直に悲しむことができた。しかし、最も身近な存在であるレイラの死から二日経った今、レイラを弔う場に来てもその不思議な気持ちに変化はなかった。

弔いの儀は、指揮官からの手向けの言葉、献花、弔砲だけで簡素に執り行われる。ティナは代表としてレイラへの献花を行うことになっていた。

手短かに手向けの言葉を語る基地司令は、その中でティナについて言及する。

「この中には、空に散った同志の報いとして未熟ながらも多大な戦果を挙げた者もいる。虚しくも生き残ってしまった我々が彼らにできる弔いは、勝利を得ることより他にない」
別にそんなことを考えて敵を墜としたわけじゃないのに、とティナは基地司令の話聞き流す。

話が終わると、飛行服を着込んだままのティナは一步前に出て基地周辺で摘まれた雑多な花

束をレイラの棺の前に添えた。

背後で弔砲が轟き、時より参列者の嗚咽が耳に入る。

——どうして私は泣けないんだろう。

そんなふうに考えていても、ティナの背中是不自然なほど毅然として見えた。

あれほど仲良くしていた同胞を失った者とは思えないほど堂々と振る舞うティナの姿は、周囲から見れば奇異に映ったことだろう。

しかし、参列者の中でベッカーだけは周囲と異なる目つきを持ってティナを見つめていた。

式典が終わり、松明が消されると基地は再び暗闇に覆われる。

レイラの棺桶の片づけを手伝ったティナは、一足遅れて待機所に戻るために人気のない滑走路脇を歩いていた。

すると、月明かりに照らされた人影が目の前に現れた。

「どうだ、この基地には慣れたか」

相変わらず特徴のある声だ。顔を見ずとも、その声の主がベッカーであるとすぐにわかった。出くわした場所といいベッカーの口ぶりといい、二人の接触は偶然によるものではない。

自分に用があるのだと理解したティナは、姿勢を正してベッカーに対峙する。

「私に何か御用でしょうか中隊長殿」

「かしこまる必要はない。どうせ階級は同じだ。……と言っても、今のお前には何も耳に入らないだろうがな」

ベツカーの言わんとしていることがティナには理解できなかった。

「御用がなければ待機所に戻らせて頂きます」

「不思議なことにな、近頃のお前の態度は昔の俺にそっくりなんだ。いや、正確に言えば今の俺もさして変わりはないかもしれないが」

会話がかみ合わない。それに、端的にしか物を言わないベツカーが回りくどい言い方をするのを、ティナは初めて聞いたような気がした。

「おっしゃることの意味がわかりません」

「大した意味は無い。独り言だ。用というのは、お前にこれを見せようと思つてな」

そういうと、ベツカーはポケットから銀色に輝く何かを取り出した。

差し出されたそれは、痛んだ懐中時計だった。装飾に凝っているので軍用ではないことは明らかだ。ただ、その美しい外装もところどころ黒ずんでおり、盤面を覆うガラスにはヒビが入っている。しかし、そんな状態とは裏腹に針は着実に時を刻んでいた。

非常に特徴のある品ではあったが、ティナはその懐中時計に見覚えがなかった。

「これは一体なんでしょうか」

「一昨日撃墜されたパイロット……レイラと言ったか。彼女が身につけていたものだ」

その言葉にティナは多少動揺する。

しかし、レイラの遺品であれば後でまとめて整理して本国に送り返す手はずになっている。なのに、なぜそのひとつが目の前にあり、ティナに差し出されているのかはわからなかった。

「これは彼女の飛行服のポケットに入っていたそうだ。見たところ軍用品ではないし、彼女は腕時計もつけていたはずだ。思い当たりはないか？」

思い当たり。大事なものであるのは確かかなようだが、ティナはその懐中時計をレイラが身につけているところを見たことがなかった。古くから思い入れのあるものなら、目につく機会があってもおかしくはないはずだ。

黙り込むティナを見て、ベツカーは相変わらず淡々とした態度で手を降ろした。

「わからないならそれでいい。特にお前に見せる必要もなかったんだが、誰かから贈り物だとすれば遺品の送り先に言伝してやるうと思つただけだ」

贈り物——その言葉を聞いてティナは合点がいった。

おもむろにポケットをまさぐり、あるものを取り出す。それは、懐中時計とよく似た装飾が施されたコンパスだった。

「それは……コンパスか。この懐中時計と似ているな」

「このコンパスは、ここに派遣される前に原隊の飛行隊長から餞別に頂いたものです。恐らく、レイラが受け取ったものがその懐中時計だったのでしょう」

時計もコンパスと同様に、飛行機乗りにとって欠かせない必需品だ。コンパスは方位を把握するためのものだが、飛行時間がわからなければ飛んだ距離を計算して自機の位置を割り出すことはできない。

だが、機体に標準装備されているコンパスと同様に、時計は丈夫で正確な軍用の腕時計が支給されるのが普通だ。わざわざパイロットが持ち込む必要はない。

飛行機長は似たような意味合いを込めてあえてティナとレイラには別々の物を選んだのだろう、

ティナは、レイラがその懐中時計を今まで見せなかった理由がなんとなくわかった気がした。普段から歯に衣着せぬ態度をとるレイラは、真面目だがあまりものを言わない飛行隊長とどことなく噛み合っていないかった。しかしながら、内心では互いに親しみを持っていることは傍目から見てもわかった。

きつとレイラは、この懐中時計を受け取って嬉しかったのだろう。しかし、飛行隊長とはそりが合わないといったようなそぶりを周囲に見せていた手前、気恥かしくて隠していたのだろう。

ティナは、レイラが死んでから今になって初めて昔のレイラの姿を思い出した。

初めて会ったときは無暗やたらにつかかってくる嫌味なやつだと思いが、それも不器用さ故のものだとティナにはすぐにわかった。ティナは飛ぶこと以外には無頓着なタイプだが、レイ

ラは飛ぶこと以外で自分を表現する術を持たないタイプだったのだ。

そして二人は空の上で認め合った。ティナとレイラは、初めて共に飛べる仲間がいることの楽しさと頼もしさを知り、互いを必要とし合ったのだ。

しかし、今やレイラはティナの心の中のものとなってしまった。

そして、今日までティナが心の奥底に隠していたものは、そのレイラとの思い出だった。思い出がなければレイラとの関係を再認識することはできない。つまり悲しむ必要がなかったのだ。

その心の堰が崩壊した今、レイラとの思い出が次々と湧き上がってくる。

いつの間にか、ティナの頬には涙が伝っていた。二日越しの涙は留まることを知らず、夜露に濡れた芝生に滴り続けた。

ベッカーはそんなティナの様子に動じることもなく、おもむろに懐中時計を差し出す。

「この時計はまだ動いている。あの墜落からしたら奇跡のようなものだ。この時計はお前が持っているといい。時計の針を止めるな」

涙で歪んだ視界の中で、ベッカーの持つ懐中時計だけが鮮明に浮かび上がっていた。

ティナの嗚咽は月夜の空に空しく響く。

傷ついた懐中時計と綺麗なコンパスが手の中で一つになったとき、ティナは再びレイラと一つになつた気がした。全てを乗り越えてきた二人の意思は、ティナの心の中で一つとなり再

び燃え上がる。

ベッカーは、そんなティナを澄んだ目で見つめ続ける。決して言葉や態度で慰めようとはしなかった。

むしろ慰めなど必要はない。

今のティナに必要なものは、悲しみを癒すひと時だけあれば十分だった。

7

翌日。一晚中泣き続けたティナは早朝にレイラの遺品整理を済ませ、原隊の飛行隊長とレイラの遺族に手紙を書いた。その手紙は、レイラの死を知らせるためのものではなく、レイラの死に対して同期でもあり友達でもある自分の気持ちを率直に伝えるためのものだった。

自己満足だったかもしれないが、戦死通知書だけでレイラの死を伝えたくはなかった。レイラが生きていた証を残したいという思いがあつての行動だ。

そして全てを終えた後、ティナはまた空へと舞い戻る。

繰り上げで第三小隊の小隊長となったティナは、即日のうちに列機を引き連れてベッカー率いる第四中隊の要として働くことが求められた。

戦況の激化に伴い、空で小競り合いが起こらない日などなく第四中隊は哨戒飛行か防空任務で毎日駆り出されることになる。

そんな渦中に放り込まれたティナは、めげることなく期待以上の活躍を見せていた。

基本的にフォローに徹する役回りなので目立ったスコアを挙げているわけではないが、「ティナが後ろにいると必ず助かる」とにわかには語られるほど僚機の被弾率が下がるのがティナの特徴だった。それは、敵を見つける嗅覚と敵の行動を予測する勘、それに広域的な状況把握が加わることで発現された能力だった。

しかし、未だ基地内での立ち位置がルーキーであることに変わりはなく、実戦経験も十分とは言えなかった。それは急ぎよ集められた義勇軍全員に言えることでもあった。

そこで、ベッカーは任務の間を縫って訓練の時間を設け、ティナを含めた義勇軍組の練度を底上げする方針を掲げた。前線に展開する基地にしては珍しい話だが、それだけ個々のパイロットの技量向上が求められるほど機体が不足しているという事情があつてのことだった。

雲のない快晴の空の下で、今日も朝の哨戒飛行の間を縫って訓練が行われる。

その締めくくりになったのは、ベッカーの〈フェスカ〉とティナの〈モラन्दル〉が一对一で対峙する模擬空戦だ。

基地上空一五〇〇メートルで、青い機体と黒い機体は狂ったように舞い踊る。

激しい空戦機動により、時より翼端が雲を描いて交差する。その美しいダンスに基地中の兵士達が見とれていた。

ティナは〈モラन्दル〉の中で必死に操縦桿を倒す。しかし、後ろを振り向いてみるといつ

の間にかベツカーの操る〈フェスカ〉がぴつたりとついてきていた。
受信機よりベツカーの声が轟く。

『〈フェスカ〉はほぼ全ての性能面で〈モランデル〉を上回っている。相手の土俵に上げれば一瞬で食われるぞ！』

返事を返す余裕もないティナは、渾身の力で操縦桿を引き上げてループ機動で〈フェスカ〉を振り切ろうとした。しかしベツカーはその誘いに乗らず、あえて緩い斜めループを描いて速度を維持したまま〈モランデル〉に追い続けた。

一瞬、ティナは〈フェスカ〉を引つpegすことに成功したと錯覚したが、高度と速度を維持した〈フェスカ〉は依然、有利なポジションを維持していた。

疲労困憊したティナが操縦桿を緩め、機体の挙動が乱れると再び〈フェスカ〉が後ろについてくる。

『これで五回目の撃墜判定だ。意地を見せてみる！』

「はー！」

不甲斐ない自分の動きに悔しさだけが込み上げてくる。

ティナの不利は決して機体性能の差だけではな。圧倒的な実践経験の差が浮き彫りになっていた。

レイラならこの状況をどう打開するだろうか。激しい遠心力で頭から血の抜け、意識が朦朧

とし始める。

ティナは胸ポケットに入れられた懐中時計を服の上から握る。

すると、レイラに「根性無し」と馬鹿にされているような気分になった。レイラならこんな状況でも必ず諦めない。むしろ焚きつけられ、より鋭い飛行を見せることだろう。

そんなレイラの姿を思い出したティナは、光明を見出す。

ティナは再びスロットルを上げながら操縦桿を引いて縦機動に移る。しかし、今度はループではなく、フットペダルを踏み込んだ状態で行うバレルロール——螺旋機動——を行った。

ベツカーは冷静にこれに続く。比較的緩い機動で行われるバレルロールは横の動きがある分、照準がつけにくいと追いつけるのは簡単だ。

だが、ベツカーは目を疑った。ロールの頂点を過ぎたところで、今まで追っていた〈モランデル〉が突如として消えたのだ。

ベツカーはまだその機動を目の当たりにしたことはなかった。

誘い込むかのようなバレルロールから失速を利用した急反転を行う機動、それはレイラを撃墜したへ白いフェスカ〉が見せたテクニクだった。ティナは脳に焼き付けたそのイメージを即興で再現してみた。

ティナ機を見失ったベツカーは、そのままバレルロールを終えて再び縦機動で入り仕切り直しを図る。だが、急反転したティナ機を振り払うには正直すぎる機動だった。

両機がぶつかりそうになるほどの距離で交差するその瞬間、照準器の中に相手の姿を捉えたのはティナの方だった。

すかさずティナは通信を入れる。

「今のタイミングならすれ違いざまに撃墜できました」

『一瞬後ろをとったくらいでいい気になるな。まあいい、今日はもう上がりだ。先に帰投しろ』
心なしか、無線越しに聞くベツカーの声は満足げであった。

模擬空戦を終えて、先に着陸していたティナはベツカーを出迎えた。

激しい戦闘機動により疲労困憊しているはずだが、ティナの顔はいつも以上に生き生きとしていた。

駐機所に移動してきた黒光りする〈フェスカ〉からベツカーが飛び降りる。ティナは敬礼でこれに応じた。

「お疲れ様ですベツカー中尉。ご指導ありがとうございました！」

「なかなか良い動きだったな。だが、まだ〈モランデル〉の特徴に引つ張られすぎる面がある。機体性能を生かす飛び方もいいが、これからはもっと実戦に即した動きを覚える」

「はー」

ティナにとって、ベツカーは尊敬できる唯一のパイロットになっていた。

レイラの葬儀の際にあつた一件は、ベツカーなりの気遣いであるということはティナにもわかっていった。不器用なのか計算づくなのかよく分からないやり方だったが、憐れみを受けるよりは何倍もいい。

互いに口に出さずとも、今日のように「空で語る」ことができればそれでよかった。先のしごきも、ベツカーなりの励ましたったのかもしれないとすら思う。

すこし買被りすぎなことは自覚していたが、態度は別にしろ戦闘機乗りとしての腕が一流なことに変わりはない。それだけで慕う根拠としては十分だった。

「ベツカー中尉、お願いがあります。私にもっと〈フェスカ〉のことを教えてください」

「〈フェスカ〉のことだと？ それを知ってどうする」

「敵が繰り出してくる機体で最も手強い相手は〈フェスカ〉です。機体性能に差があるなら、もつと敵機の特性を知ってその弱点を見つけないんです。ベツカー中尉が知っている〈フェスカ〉の全てを教えてください」

ベツカーの脇を歩きながらティナは深々と頭を下げる。

それを見たベツカーは足を止めてティナに向き直った。

「いいだろう。一度、俺の〈フェスカ〉にも乗ってみるといい。計器の見方と機器操作の違いだけ覚えればお前なら飛ばせるはずだ。ただし、俺も〈モランデル〉に乗せろ。互いの機体差を学ぶなら両方乗るのが手っ取り早い」

「はー」

ティナは、〈モランデル〉の座席を譲ることに何の躊躇いもなかった。

普通、基地に配備される機体は整備等の都合で稼働できる日が限られるため、パイロット達は定期的に機体を交換するのが常である。しかし、ティナは原隊で〈モランデル〉を受領して物心ついた頃から、頑として愛機の席を譲ったことはなかった。

自分で整備・点検をした機体に乗りたいという言い訳もできたが、本音を言えば長らく共に飛んでいる機体に只ならぬ愛着を感じていたのだ。他人に乗られて良い気がしないのは当然である。それは練達したパイロットなら誰もが抱くものだった。

しかし、ベッカーは進んで自分の愛機に乗れという。互いに信頼し合っていないのであればできない提案だ。たった二週間足らずの付き合いだが、ティナとベッカーは互いの腕を認め合うことで深い関係を築きつつあった。

しかし、それは空の上に限つての関係だ。

「ティナ、今日はもう待機していなくていい。〈モランデル〉も整備に回して兵舎でゆっくり休め。恐らく空襲もないだろう」

「はい。中尉の方は？」

「俺も〈フェスカ〉の調子を見たら休む。明日からはまた訓練と前線哨戒だ。体力を温存しておけ」
そう言い放つと、先ほどまでの態度からうつつ変つて話は済んだと言わんばかりにベッカー

は指揮所に向かって歩き出していた。

ティナはそんなベッカーの背中を見つめることしかできなかった。

地上に降りれば二人の関係は指揮官とその部下でしかない。飛ぶことに関しては師弟のような関係を持ってても、それ以外のことにベッカーは一切心を開かなかつた。

仲を深める必要があるかどうかと問われると、それはわからない。もの寂しく感じるのは事実だが、ベッカーが一人の人としてティナのことをどう思っているのかを推し量ることはできなかった。

結局、レイラと同じで空を飛ぶことでしか自分を表現することができないのだとティナは改めて自覚した。

8

戦況は突如として劇的に悪化した。

その発端となつたのは、反政府軍が隣国の軍事介入を本格的に承認し、多大な政治干渉を受けるリスクを覚悟して大量の義勇軍を受け入れたことであつた。それは軍事同盟というより、実質的に傀儡政権の成立を約束したようなものであつた。つまり、反政府側が勝利するということは、国家としての独自性が侵食される可能性を示唆していた。

しかし、国民の大多数がこれに反感を抱いたかと言えばそうでもない。一国家として不安定

なままだ独立しているよりは、大国の庇護にあずかった方がマシだという考えもにわかに浸透しつつあったのだ。それは、長らく続く内戦により疲弊した国民の本音の表れでもあるとも言えたが、母国のアイデンティティを守るうとする層——現政府側——との対立は必至だった。

結局のところ、隣国の更なる軍事介入は国民間の溝を深めただけであり、大量に流入した兵器と義勇軍によつて戦火が拡大したにすぎなかったのだ。

終わりの見えない戦いが続く。

人々はもはや勝利に向けて戦っているわけではない。平穏を維持するために戦うという矛盾を抱いて銃をとり、昨日の友を殺し回っているのだ。

そんな中でティナは複雑な心境を抱きながらも、日に日に不利になる空の上を必死に生き抜いていた。

曇天の空の下、今日も〈モランデル〉は空を舞う。

「敵四機、直上より飛来！」

持ち前の勘で敵の来襲を察知したティナは素早く回避運動をとる。無数の弾痕が残る〈モランデル〉は、傷つきながらも力強くティナの反応に応えた。

敵機が後ろに食らいついてきたことを確認したティナはスロットルを上げ、フットペダルを踏み込みながら螺旋機動に移る。幾度と繰り返してきたその機動は体に染みついていて、

魅惑的な機動を持つて敵を誘い込み、不意に舞い落ちる花びらの如く消え失せる挙動。そし

て、気付いた瞬間には茨のツタに絡めとられている。ティナと〈モランデル〉の繰り返す幻惑の特殊機動——レイラを葬った悪魔のテクニクは今やティナのものとなり『ローズ・バレールール』の名で敵に恐れられていた。

その魅惑に誘い込まれた一機の〈フェスカ〉は、〈モランデル〉を見失ったことに慌てて脈絡のない挙動で機体を水平へと復帰させる。その隙を逃さず、いつの間にか〈フェスカ〉の側に回り込んでいた〈モランデル〉は、飢えた獣のように火を噴く。

機関砲から放たれる無数の徹甲弾は〈フェスカ〉の主翼に吸い込まれ、そのスマートな羽を粉碎する。ティナは〈フェスカ〉の主翼が機関砲の射撃に弱いことを経験的に知っており、端部が粉碎されると水平飛行もままならなくなるといふ〈フェスカ〉独特の飛行特性も熟知していた。それらは全て〈フェスカ〉に対抗するために培った知識だ。

たちまち片側の羽を失った〈フェスカ〉は、パイロットを脱出させる間も与えずスピルしながら地上に飲み込まれる。もはや見慣れた光景だ。

列機を失った敵編隊は、同志の仇を討つためにティナの〈モランデル〉へと一斉に襲いかかる。しかしその復讐は果たせなかった。どこからともなく雲の中から現れたベッカーの〈黒いフェスカ〉が直上攻撃を仕掛けてきたのだ。

また一機、敵の〈フェスカ〉が黒煙を吐いて墮ちてゆく。

後は流れ作業も同然だ。不意の攻撃を受けて分断された敵は編隊を維持することができなく

なり、たちまちティナとベッカーに各個撃破されていった。

ここにきてティナの戦果は通算二七機を数えていたが、もはやその数字に意味などなかった。いくら戦果を挙げても戦っただけ味方は撃墜されていく。結局、今日も生き残ったのはベッカーとティナだけになってしまった。

地上では先ほど撃墜された味方機が炎上し、黒煙をあげている。

そんな光景を見ながら、彼らの屍の上に築きあげられた戦果など称えられようものではないとティナは自分に言い聞かせた。

ティナは周囲に敵機がないことを確認し、ベッカーの〈黒いフェスカ〉に近づいて目を合わせせる。

顔を見合わせた二人は互いに何か反応を見せるわけでもなく、それでいて両者は先の戦闘の顛末に納得する。空にいるだけで「繋がる」ことのできるティナとベッカーに、もはや言葉は不要だった。

無意識のうちに意思疎通を可能にする信頼を超えた関係。それは戦場という環境が生み出した限られた繋がりでだ。

両機は申し合わせたように帰路に着く。敵地の上空で長らく戦闘していたため、燃料・弾薬は底を尽きかけていた。

——いつまでこんなことを続けられよう。

先を行く〈黒いフェスカ〉を眺めながらティナは思う。

ベッカーと共に戦っている間は何も考える必要はない。

しかし、ひとたび戦闘が終わればそこにあるのは虚無感だけだ。

何のためにこの国に来たのか。何のために戦っているのか。考えても答えの出せない疑問が浮かんで消え、途方もない重さをもってティナに押し掛かっていた。

——実戦と聞いて興奮するのはいいがな、実戦はいいことばかりじゃないぞ。むしろ辛いことの方が多し。

ティナは旅立つ前に聞いた飛行隊長の言葉を思い出す。

——なにせよ、実戦に出るとはそういうことだ。脅かすつもりはないが、貴様も少なからず似たような体験をすることになるだろう。覚悟しておけよ。

飛行隊長は、悲劇の爆撃作戦の顛末を知って何を思ったのだろうか。そして、それに似たティナ自身の体験とは何だろう。レイラの死か、それとも憎みもしない敵を殺し続けることか。

飛んでいる最中にこんなことを考えるのは初めてのことだった。

ティナは飛行隊長とベッカーの姿を再び重ねる。ベッカーは戦いながら何を考えているのか。短くも深い付き合いを続けているはずだが、そういった会話は一度たりともしたことがなかった。

全てが終わったとき、語り合える時が来るのかもしれない。しかし、それは二人が生き残っ

ていればの話だ。

死への恐怖が突如襲ってくる。それは自らの死を恐れているわけではない。ベッカーの死を恐れているのだ。

そしてその不安は突如として現実感を持ち始めた。

敵の気配を感じる。いつもに増して強烈な感覚だ。

ティナはとっさに送信機のスイッチを入れて叫んだ。

「三時の方向、上方に注意してください！」

勘で察知した敵の気配を他人に伝えたのは初めてのことだった。だが、ティナの注視する方向——太陽の位置にある小さな雲の裂け目は、敵が襲撃をかけるには絶好のロケーションだ。雲の上にいる敵機が攻撃を仕掛けてくるとしたらその位置以外に考えられなかった。

『敵を見つけたのか？ 報告は正確にしろ』

何もない雲の裂け目を見たベッカーは、ティナの発言の真意を測り損ねる。

しかし、その一瞬の注視が功を奏した。

雲の裂け目から差し込む一筋の太陽光の中に、突如として独特のシルエットが浮かび上がる。ベッカーは反射的に操縦桿を倒し、回避運動をとった。

先ほどまでベッカー機のいた空間に曳光弾の軌跡が走る。間一髪のタイミングだ。

悪魔の如き熟練度と周到さをもって巧みな射撃を行ったその機体は、ティナ機とベッカー機

の間を高速で駆け抜ける。

細くスマートな胴体を持つその機体は純白に塗装されており、太陽光をを乱反射させる。その姿はあたかも舞台でスポットライトを浴びる主役のように輝き、見る者全てを圧倒させるだけの威圧感を持ち合わせていた。

ティナはその姿を片時も忘れたことはなかった。

〈白いフェスカ〉——ローズ・バレルロールの使い手であり、レイラを撃墜した因縁の相手——がそこに存在していた。

ティナは先ほどまでの不安を一気に忘れ去った。かつてない対抗心が湧きあがり、心は熱く燃えたぎる。復讐心だけがティナを突き動かしているわけではない。手強い相手と認めているからこそ、戦闘機乗りとして興奮していることをティナは否定できなかった。

「敵一機、五時の方向を上昇中！ 〈白いフェスカ〉を迎撃します！」

『待て、深追いはするな。他に敵がいる可能性もある。様子を見るんだ』

ティナをたしなめるベッカーの口調はいつも通りの落ち着いたものだった。

それでもティナは食い下がる。

「相手は敵のエースです。奴を撃墜できれば敵に多大なダメージを与えられます。二対一の今が奴を仕留める絶好のチャンスです！」

『しかし、こちらは手負いだ。少しは生きて帰ることも考える』

「私たちの目的は生き残ることじゃありません。敵を殺すことです。違いますか？」
『……』

ティナは自分の強引さを十分に自覚していた。しかし、今ここで〈白いフェスカ〉と決着をつけなければ一生後悔するだろうと直感的に感じていた。何の合理性も持たない理由だが、飛ぶこと以外に何も持たないティナにとって、「空」での因縁は全ての人生を賭けるに足るだけの価値を持つているのだ。

そうこうしているうちに、一撃離脱に失敗した〈白いフェスカ〉は速度を維持したまま雲の上へと消えてゆく。逃げの一手ではあるが、ティナはその後ろ姿に「誘い」の色があるように感じられた。

二対一であろうと果敢に襲いかかってきたその姿勢には、絶対的な自信が感じられる。その実力はベッカー以上であることが易々と想像できた。

ティナにとっては永延と長らく感じられた間の後、無線機のノイズが静寂を破る。

『……追撃しよう。だが、生きて帰ることが条件だ。上官として命令する』

「了解！」

ベッカーと二人ならば必ず勝つことができる。ティナは、かつてレイラと共に飛んでいた頃の自信を思い出していた。

胸ポケットに入れた懐中時計とコンパスを強く握りしめる。

〈白いフェスカ〉にいざなわれた二機は並んで雲の裂け目を駆け抜ける。差し込む太陽光は〈フェスカ〉と〈モランデル〉を照らし出し、その美しさを強調し合っていた。

——やっぱり私は飛ぶことしかできないんだな。

考えることなど何も無い。全てを空に任せればいい。

ティナは操縦桿を優しく撫で、二人の相棒と共に全てを受け入れる覚悟を決めた。

9

雲の上に到達したティナは、久しく見た太陽光を浴びて目を細める。

視界が開けると翼下には広大な雲の海が広がり、頭上は無限の青空が覆い尽くしている。

先ほどまで見ていた曇天の景色が嘘のようだ。

雲の上は、飛行機乗りのみが立ち入りを許された神秘的な空間だとティナは常々感じている。この美しさを見て感動しない者はいないとすら思う。

そんな壮大な空間にいて、更に目立つ存在が目に入る。

雲の反射光に照らし出された〈白いフェスカ〉は、逃げることなく堂々と待ち受けていた。雲と同じ色を纏ったその機体は、強い存在感を放ちながらも空間の秩序を乱すことなく優雅に上空を舞っている。たった一機でありながら、その姿は雲の上の支配者も同然だった。

むしろ、汚れ傷ついているティナの〈モランデル〉とベッカーの〈黒いフェスカ〉の方がよっ

ぼど場違いだ。

ちぐはぐで矮小な存在だからこそ手を取り合う。孤高になることができなければ寄り添えばいい。それこそが、ティナが空の上で見つけた一つの答えだった。

「周囲に敵影はありません。どうやら相手は本当に一機だけのようです」

『やつを追ってきた俺たちが言えたことじゃないが、たった一機でやりあおうとはよっぽど物好きだな』

〈白いフェスカ〉が何を思っただけで向かってくるのかなど考える必要はない。空の上で戦えば、全てを語り合うことができる。

ティナはスロットルを全快にし、全てに決着をつける覚悟を決めた。

「私は正面から行きます。ベッカー中尉は高度をとって優位な位置についてください」

『すれ違いざまに随とされるなよ!』

ベッカーと言葉を交わして間もなく、〈モランデル〉と〈白いフェスカ〉は一気に距離を詰めて互いの射程圏内に入ろうとする。直進すれば正面衝突するコースだ。

空中戦において、初撃が向かい合った状態で行われる「チキンレース」はよくみられる光景だ。だが、相撃ちになりやすいため手練のパイロット同士なら本来は避けるべき戦い方とされている。

しかし、一度向かい合ってしまうと臆して回避を始めた方が不利な位置をとられる。だから

こそ「チキンレース」になるのだ。

ティナは何の迷いもなく照準器の中央に〈白いフェスカ〉を捉えたまま直進する。

胸の鼓動が高鳴り、手袋の中は汗にまみれる。幾度となく繰り返してきた経験だ。恐怖に打ち勝つ興奮こそが空で戦う者には必要なのだ。

狭い視界の中には、照準器越しに〈白いフェスカ〉だけが映り込んでいる。その美しい姿を明確に捉えた瞬間、互いの機体は火を噴き機銃を浴びせ合った。

射撃と着弾の衝撃で機体が大きく揺れる。風防が割れ、機銃弾が機内を跳ねまわりティナに襲いかかる。

『大丈夫か!』

激しい衝撃に一瞬視界を奪われたが、ベッカーの無線によりすぐに意識をとり戻す。どうやら命だけは無事のようにだ。

しかし、気がつけば頭と肩口からは鮮血が滴っており、右目は開けられなくなっていた。致命傷ではないが、片目の視力を失ったのは手痛い。

〈モランデル〉の方も幸いにしてエンジンは無事ようだが、操縦感覚に違和感を覚える。どこか損傷しているようだ。

なんとか態勢を立て直したティナは即座に旋回して〈白いモランデル〉の様子を窺う。

手応えはあったものの、〈白いフェスカ〉は悠々と飛行を続けている。今は上昇しながら再

び高度をとっていた。機銃は命中させたはずだが、有効弾は与えられなかったらしい。

ティナは流れる血を拭いながら無線で答える。

「こちらの損傷は軽微、まだやれます。それより中尉、下方から敵が接近中！」

〈白いフェスカ〉は、ティナを襲った際に得た速度を利用し、上空を飛ぶベッカーに標的を移す。これに対応したベッカーは、即座に優位な状態から縦機動のドッグファイトに突入した。〈黒いフェスカ〉と〈白いフェスカ〉がループを繰り返し、互いの尻尾を掴もうとする。同型機の戦いでものを言うのは己の腕だけだ。

上つては落ちる機動を繰り返す二機は青空に綺麗な輪を描く。ティナはサポートの機会をうかがいながらもその姿に見惚れていた。

荒々しい獰猛さを見せつける〈黒いフェスカ〉は、獲物を狙う大鷲のように飛びかかる。対して、乱れのなく優雅に舞い踊る〈白いフェスカ〉は白鳥のようにひらりと舞ってそれを回避する。

同じ機体を操りながら対照的に飛ぶ二機は、互いの動きに呼应して予測不能な変化を続ける。時には正攻法で、時にはひっかけを用いて互いに綻びを探り合う。隙を見れば一瞬でケリがつく空中戦においては気の緩みが仇となる。

そして形勢は〈白いフェスカ〉に傾きつつあった。〈白いフェスカ〉は、持ち前の無駄のない飛行で常に速度と高度を維持している。対して、敵に食らいつくことを最優先にしている〈黒

いフェスカ〉は一見すると攻め続けているように見えるが、みるみるうちに速度を失って不利な位置に誘い込まれていた。

突如として〈白いフェスカ〉はループを止めて水平飛行に移る。当然、〈黒いフェスカ〉はこれに続いて後ろをとる。速度差はあるものの、互いの距離は一〇〇メートルを切っており、一時的に必中の間合いに入れる。

ローズ・バレルロール——わざと相手に後ろを取らせるその動きは、レイラを撃墜した際に見せた「誘い」の初手そのものだった。

たまらずティナは無線で呼び掛ける。

「ベッカー中尉！」

レイラのと看とは違い、今度はしっかりと送信機のスイッチを上げて叫んでいた。

しかし返信はない。返す余裕もないのだろう。

ベッカーも当然のことながらこれが罠だとわかっているはずだ。それに、ティナは一度ベッカーにローズ・バレルロールを披露している。先の呼びかけが何を意味しているか、ベッカーが理解しているものと信じて固唾を飲む。

〈モランデル〉も、やっこのことで交戦高度まで到達していたが、ベッカーが後ろについている状態でローズ・バレルロールを阻止する手立てはない。

レイラの時と同じように、ティナには見守ることしかできなかった。

全ては必然の出来事のように〈白いフェスカ〉は螺旋機動を開始し、〈黒いフェスカ〉がそれに続く。

二機が螺旋機動の頂点に達した瞬間、機体を垂直に立てた〈白いフェスカ〉は目を疑う程の速度で重力に身をまかせて落下する。到達する先は、〈黒いフェスカ〉から見て死角になる位置だ。

しかし、ティナには見えている。この場において唯一、両者の位置関係を第三者の視点で見ることができなのだ。

「右フット、ペダル！」

反射的にティナは叫んだ。状況を伝えるわけでもなく、操作のみを指示する。

ベッカーは即座にこれに応える。

右フット、ペダルが踏み込まれ、右に大きく旋回した〈黒いフェスカ〉は再び〈白いフェスカ〉と対等な位置関係を得た。

ローズ・バレルロールは失速を利用して高速旋回を行う技であるが、それ以上に追い縋る相手に突如消えたような錯覚を見せることで成立するテクニクだ。敵の未来位置を予測し、的確な行動が取れば不利になることはない。

ベッカーが立ち直り、仕切りなおしになったところで援護を始めればいい。危機を未然に防いだことでティナは安堵した。

しかし、状況はまったく予測のつかない方向へと推移していた。

ローズ・バレルロールを終えた〈白いフェスカ〉は、突如として急上昇を始めたのだ。有利な位置を確保しながら、ベッカーを追おうともせず再び螺旋機動を始めるそぶりを見せている。

その動きは、もはやバレルロールとは言えなかった。一度目のローズ・バレルロールで大きく速度を失ってる〈白いフェスカ〉は、失速ギリギリの状況で上昇している。そのままいけば失速してスピンを起こしかねない危険な機動だ。

ティナは次の瞬間、己の目を疑った。

案の定、失速を起こした〈白いフェスカ〉はエンジンの推力を完全に失い、ブーメランのように真横に回転しながら空を舞う。その動きは決して失敗によるものではなかった。故意に起こされたスピンは、計算しつくされたかのような秩序を持って華麗に舞っている。

それは、空の上で行われたジャンプだった。揚力を打ち消し、上向きの速度だけをもって何もない空間で飛びあがる。後は重力にまかせて落下しながら着地——通常の飛行状態に復帰——する。

ティナは今日の前で起きた現象を受け入れられなかった。スピンは揚力と推力を失った際に発生するため、通常の機体操作を殆ど受け付けられない状態に陥るのだ。だからこそ、一度スピンを始めてしまった機体はそのまま復帰できず落ち葉のようにくるくると回りながら墜落してし

まうという事態が往々にして発生する。

だというのに、故意にスピンを起こして復帰した〈白いフェスカ〉は、始点から終点までのプロセスを全て先読みしてスピンを始めたことになる。

三次元的機動を予測計算し、それを正確に実行するなど人間業ではない。

何がそれを可能にしたのか。それは「勘」なのだろう。

ティナが敵の気配を察知したりできるように、空に愛され、空の声を聞ける者にしか成せない業を〈白いフェスカ〉も持っている。

そんな究極の曲芸飛行とも呼べるスピン旋回を行った〈白いフェスカ〉は、再び最少の旋回半径を得て〈黒いフェスカ〉の側面をとった。

二機が演じたダンスの終局だった。数秒後には機銃の直撃コースを通る〈黒いフェスカ〉に、回避する術は残されていない。

「嫌！」

ティナは悲痛に叫ぶ。既に攻撃位置についている〈モランデル〉は、いつでも仕掛けることができる。しかし、それは〈黒いフェスカ〉が撃墜された後の話だ。位置的に高速ですれ違う〈白いフェスカ〉の射撃を阻止することはできない。

また目の前でペアが死ぬ光景を見せつけられる。想像しただけで意識が遠のきそうだった。自分の無力さを再び痛感する。いつも見てるだけで、結局は何もすることができないのか。

全てを諦めかけた瞬間、胸の中に甲高い金属音が響いた気がした。

それは、飛行体長から貰ったコンパスとレイラの懐中時計が入れている位置だ。二つがポケットの中でぶつかり、音を立てたのだろう。

ティナにはその音がレイラからの叱責のように思えた。

——私を超えなさい。

そんな言葉がふと頭の中に浮かぶ。

レイラの死を超える。レイラの実力を超える。その全てを乗り切らなければ何も前には進まないのだ。

ティナは再び正面を向き、全てを打ち破るために操縦桿を握った。

ターゲットを照準器の中に捉え、機銃発射レバーを軽く押さえる。今からやろうとしていることが成功する保証は一切ない。

しかし、成功させねば全てを超えることはできない。

狭い視界の中で、ただ一点だけを見つめる。

レイラと共にいれば何でもできる気がする。レイラが死んだ今尚、その気持ちに変わりはない。かかった。

全身全霊をかけて、ティナは発射レバーを握った。

ティナの放った機関砲弾は、一切の乱れをきたさずにある一点へと吸い込まれていった。徹甲弾がジュラルミンの外板と骨組みを粉碎し、部品をバラバラに砕く。

ティナが狙ったのは、なんとベッカーの操る〈黒いフェスカ〉の尾翼だった。尾翼の一部を破壊された〈黒いフェスカ〉は、その衝撃によりバランスを崩して大きく速度を失う。

そして、そのタイミングこそが紙一重だった。同時に射撃を開始した〈白いフェスカ〉は、急減速した〈黒いフェスカ〉を捉えきることができず的確な射撃を行う機会を逸したのだ。

しかし、それでも食い下がる〈白いフェスカ〉は、追突ギリギリの位置まで接近して渾身の射撃を行う。

〈黒いフェスカ〉の機首を捉えたその機関砲弾は、エンジンルームを跳ねまわる。本来は操縦席を直撃するはずだった弾は、〈黒いフェスカ〉の息の根を止めるに留まった。

ティナの行動に驚愕しながらも射撃を終えた〈白いフェスカ〉は、再び姿勢を戻して仕切り直しを図ろうとする。

しかし全てが遅かった。ギリギリまで近づいて射撃を行った〈白いフェスカ〉は復帰のタイミングを逸し、〈モランデル〉の射線上に飛び出していた。

だが、〈モランデル〉に〈白いフェスカ〉を仕留めるだけの弾は残されていない。先の射撃により機銃・機関砲共に全て使い切っていたのだ。

それでもティナは、照準器に〈白いフェスカ〉の姿を捉え続ける。

ベッカーの命を救ったとはいえ、エンジンの停止した〈黒いフェスカ〉は滑空するただの的になり下がっている。

ここでティナが〈白いフェスカ〉を仕留め損ねれば確実に逆襲される。であれば、どうすればいいのか。

簡単なことだ。このまま〈白いフェスカ〉を捉えながら真つすぐ飛べばいい。二機が極限まで接近し、そのあとどうなるかなど考える必要もない。

ティナは覚悟を決めて操縦桿を一層強く握りこむ。

結局、実力で勝ったとは言えない勝負だった。それに、最後は戦闘機乗りのプライドまで捨てた「体当たり」で決着をつけようとしている。そんな戦いであっても、ティナの胸は満足感で溢れていた。

ベッカーを救うことができた。空の上で自分にもできることがあると証明して見せたのだ。空の上で存在感を得ることこそがティナの願望だった。

それは叶った。レイラを犠牲にし、〈モランデル〉を巻き込み、自分の命を捧げてまでして、やっと得ることができるのだ。

もはや何の未練も感じない。むしろ、早くレイラの元へ行きたいとすら思えてくる。気がつくくと、〈白いフェスカ〉の姿が照準器いっぱいに映り込んでいた。

——なんて美しい機体だろう。

間近で見ても色あせないその美しさは、雲と青空に溶け込み輝きを放っている。

あと二秒もすれば〈モランダール〉と〈白いフェスカ〉は、その大きな花を散らすことになる。青と白の翼が雲の上で舞い散る場面を想像し、ティナは感嘆した。

——ごめんね。

それは〈モランダール〉に向けた最後の言葉だった。二人で共に歩んできたはずなのに、最後の最後で自分の我儘を〈モランダール〉にも押しつけてしまった。悔いがあるとすればそれだけだ。飛び散ったティナの血は〈モランダール〉の操縦席を染め、一体となって馴染んでいる。傷つきながらも素直に飛ぶ〈モランダール〉は、ティナの意思を受け入れていたかのようなだった。

最後の瞬間が訪れ、ティナは目を瞑る。

考えるのを止めたそのとき、鋭い声が頭を揺らした。

『時計の針を止めるな！』

空の上で幾度と聞いてきたその声は、体の芯にまで響き渡る。

時計の針を止めるな——その言葉はレイラの懐中時計を受け取った際に言われた言葉だ。

初めは、単に壊さずにとっていると言われただけだと思った。しかし、その真意は違うところにあつたのだと後になって実感する。

レイラが死んでから無情に戦い続けていたティナの時間は、ベッカーから懐中時計を受け取

るまで止まり続けていたのだ。

誰の意志でもなく、時は刻まれ続ける。あの言葉は、そんな時の中にいて自分の意志を過去に置いて行くなという意味だったのだ。

意志だけではない。ここで生きること止めれば、ティナの時間は永遠に止まることになる。それは、死んでもなおティナの中で生き続けるレイラの時を再び止めることを意味していた。

一気に覚醒したティナは、反射的に操縦桿を引く。

次の瞬間、今までにないほどの衝撃を受けたティナは、バランスを崩した機体を〈モランダール〉の意志にまかせて復帰させた。真つすぐ飛ぶことすらままならない状況であつたが、なんとか復帰を果たす。

ティナは、〈モランダール〉の最大の特徴である主脚を〈白いフェスカ〉にぶつけたのだ。大きく突き出した固定脚は強度もあり、飛行しているだけなら無用の品だ。操縦席からは確認できないが、今やその特徴ある脚は無残に破壊されていることだろう。

即座に後方に目をやると、主翼片側を折られた〈白いフェスカ〉は、スピしながら雲の中へと吸い込まれている。その美しい姿は後かたもなく、空に舞うのは端にバラバラになったジュラルミンの屑だけだ。

〈白いフェスカ〉の輝きは永遠に失われた。ティナは全ての因縁を断ち切るために〈白いフェスカ〉を汚し、葬り去ったのだ。

『相変わらず無茶なことをする……』

全てが終わりを告げると同時に、穏やかな声が無線機より放たれる。

ティナはふらつく機体をなんとか操作して、滑空を続けるベッカー機に近づいた。

どうにか〈白いフェスカ〉を撃墜できたとは言え、今の状況は芳しくない。互いに機体は満身創痍だ。

「そんなことよりベッカー中尉。エンジンの再始動はできますかー」

『無理だ。一八ミリ機関砲弾が命中したんだろう。恐らく中は鉄のシェイクになってる。エンジンを載せ替えないとコイツにはもう乗れないな』

そう答えるベッカーの声は、何故か聞いたことがないほどの陽気さを持っていた。

「でも、それじゃあ……」

対するティナは悲痛な声を上げる。

エンジンが再始動できないということは、このまま滑空を続けて近場に降りるか、機体を捨てて脱出するか選択肢がないことを意味していた。

加えて、ここは敵の勢力圏内だ。うまく地上に降りれたとしても、味方勢力圏まで脱出できる保証はない。

『……』

突如として無線機から声が途絶える。慌てて〈黒いフェスカ〉に近づき、操縦席に目をやる

とベッカーが手信号を送ってきた。

《バッテリーがイカれた》

ティナはどう返していいかわからず、心配そうな面持ちでベッカーを見つめ続ける。

《燃料が漏れてる。怪我をしている。早く帰れ》

続くベッカーの手信号を受けて確認してみると、確かに片側の胴体燃料タンクが空になっていた。体当たりをした際に配管でもやられたのだろう。残った燃料タンクだけで飛行距離を計算すると、ギリギリ帰れるかどうかといったところだ。

それに、先ほどまで興奮でまったく気にならなかったが、体に機銃を浴びていることをすっかり忘れていた。傷のことを思い出すと、急に鈍痛が襲いかかり視界が狭くなる。

《命令だ。早く帰れ》

ベッカーの無事を見届ける気だったが、うかうかしているとティナも敵地に降りざるを得なくなってしまう。それに出血の量も心配だ。

ティナは、ぶつかりそうになるほど機体を近づけ、最後とばかりにベッカーの顔を見届ける。

ゴーグルを外したベッカーは笑顔を浮かべている。普段の顔からは想像できないちよっぴり不格好なはにかみ方だ。

《すぐ戻る》

そういった旨の手信号を出すと、徐々に高度を落とした〈黒いフェスカ〉は雲の中へと落ち

込んで行く。ティナは、何度も頷きながらこれに答えた。

いつの間にか頬には涙が伝っている。ベッカーに泣き顔を見られてしまっただろうか。それでも構わず笑顔を作る。こんな血まみれの顔だと心配されるかもしれない。

さまざまな思いが頭を巡っているうちに、〈黒いフェスカ〉とベッカーは雲の中へと消えていった。

「すぐ戻る」とはどういう意味だろう。基地にすぐ戻るといことだろうか。それとも、ティナのもとへすぐ戻るという意味だろうか。相変わらず不器用なところは変わらない。

ティナは涙と血を拭い、操縦桿を倒して機首を味方基地に向ける。

満身創痍のティナと〈モランデル〉にとって、そのフライトは苦難を伴うことが容易に想像できた。

それでもやるしかない。

ベッカーは戻ると約束した。それならば、ティナもそれに答えて待っている義務がある。

「行くわよ。相棒」

そう囁いたティナは、スロットルを上げて巡航速度まで増速する。

対する〈モランデル〉は、損傷など感じさせないほど快調な唸りを上げてこれに答えた。

いつの間にか日が傾き、一面の雲が緋色に染まる。コックピットから見える〈モランデル〉の青い翼が夕日を反射させ、ティナの顔を照らしていた。

その顔に涙はなく、悲しみの色もない。今や満足感で満ちている。

ティナにとって最も充実したフライトは、最後までその美しさを損なわずに演出され続けていた。

11

あれから五年の月日が経とうとしていた。

初めて来たときよりもっと長い時間をかけて、ティナは再び某国の地を訪れた。

飛行服を着てはしゃぎ回っていた頃とは違い、地味な女物のコートに身を包んで荒廃した地を歩くティナの姿にパイロット時代の面影はない。

髪は背中まで伸び、大人びて成長したその顔は慎ましさを帯びている。また、特徴でもある見開かれた瞳には大きな眼鏡がかけられていた。五年前に行った〈白いフェスカ〉との空戦で、右目に傷を負ったティナの視力は大幅に落ちていたのだ。

結果的に、それがティナのパイロット生命を奪うことにもなった。

あの空戦から満身創痍で帰還を果たしたティナは、主脚のない機体で胴体着陸を成功させるも、漏れ出した燃料によって起きた火災で〈モランデル〉を失ってしまった。

愛機の喪失を悔いる暇もなく、すぐに病院に後送されたティナは数週間の入院を余儀なくされた。

そして、その間に突如として帰国命令を受けた。

隣国の大規模な支援を受けた反政府側の攻勢により、現政府側の敗北が決定的となったことでティナの母国が内戦の介入停止を決議したのがその理由だった。

ティナはベツカーの無事を確認することもできずに、慌ただしく輸送船に乗せられ何もかもが曖昧のうちに帰国を果たした。

それからの五年間には様々なことがあった。ティナの怪我が完治した頃には世界中で大きな動乱や戦争が相次いでおり、某国どころかティナの母国もその戦火に巻き込まれた。それが某国への再航の道を閉ざしたのだ。

結局、〈白いフェスカ〉と戦ったあの日から今日まで、ティナはベツカーとの再会を果たせずにいたのだ。

だからこそ、ティナは再びこの地を訪れた。飛ぶことを失ったティナに残されたものはベツカーとの約束だけだった。

戦争が終わり、ひと時の平和が訪れた今になってやっと約束の地に戻ってくる事ができた。

延々のように感じられる船旅を続け、止まっては進みだす気まぐれな汽車に揺られ、あの時の倍以上の時間をかけてティナはかつて基地のあった場所にたどり着いた。

晴れ渡った空の下で、変わり果てた基地の姿を再び眺める。

どうやら、ここはティナが去ってからもう長らく前線飛行場として機能していたらしい。ティ

ナがいた頃よりも設備は新しくなり、規模も大きくなっている。しかし、滑走路は爆弾と砲弾で穴だらけになり、基地施設は全て焼け落ちていた。無人となった基地の脇には朽ちた機体が山積みになり、既に内戦が終わったことを如実に表していた。

ティナは、ここに来てベツカーに会えるわけじゃないことは重々承知していた。しかし、レイラの埋葬されている墓地だけは訪れておきたかったのだ。

飛行場の散策もほどほどにして簡易墓地へ向かう。

レイラの遺体は、内戦当時は輸送量の制限もあって骨の一部が母国に帰されただけだった。そして、残った大部分は基地の近くにある戦死者用の簡易墓地に他の義勇軍パイロットと一緒に埋葬されていた。

復興が進めばレイラ含めて他の義勇軍パイロットの遺体も母国への帰還が叶うかもしれないが、何年後のことになるかはわからない。それに、この平和が長く続くとも限らなかった。

たどり着いてみると、墓標の数はティナが最後に見たときの一〇倍以上に膨れ上がっていた。基地の間人だけでなく、近辺で戦った地上軍兵士の遺体も埋葬されているようだ。

記憶を頼りにレイラの墓標を探す。その場所は忘れようはずもない。

五年の歳月によって、ティナの手で造られたレイラの墓標は黒ずんでいた。しかし形は奇麗に整っており、誰かが手入れをした跡が見てとれた。

辺境な場所であるにも関わらず定期的な参拝者がいるようだ。

ティナはひとしきり墓標を見つめたあと、レイラの墓標に花を添えようと思い立って近くの草むらまで花を摘みに行く。

誰もいない草原の中で、ひたすら花を探す。耳に届く音は時より吹く風の囁きだけだ。

ティナは、かつて基地にいた頃のことをゆっくりと思い出す。

レイラとの応報や、ベッカーの不器用さを思い出しては頬笑み、熾烈な戦いやレイラの死、ベッカーとの別れを思い出しては悔いやんで歯を噛みしめる。

五年間のうちに溜め込んだ全ての陰鬱とした気持ちがこの地に流れ落ちるようだ。

基地にいた期間は数か月にも満たなかったが、その経験は今のティナの大部分を形成する思いつきになっている。

全てはここで始まり、ここで終わった。今は自分がなんのために生きているのかよくわからなくなってくる。

それでも目的があるうちはいい。レイラの墓に花を添え、これからベッカーを探す。ただそれだけでいい。その先のことなど考えも及ばない。

花を摘み終える頃には、日が落ちて夕焼けが基地を染めていた。ティナの最も好きな時間帯だ。

また空の上から夕焼けを見ることができたらどうか。西の空を見上げながらティナは思う。

しかし今のティナは翼を失った鳥だ。もう自由に飛び回ることはできない。

片目だけでも飛行機は飛ばせるかもしれないが、その機会を与えてくれる場所をティナは思い当たらなかった。

オレンジ色に染まった草地を歩き、再び墓地へと戻る。

すると、その中に一人の人影が見えた。

軍服を着た男のようであるが、足には義足をはめて杖をついている。その姿から戦傷軍人であることがわかった。

そして、その青味がかかった軍服には見覚えがある。

ティナは堪らず走り寄り、その姿を正面から確認する。

二人は夕日の中で向かい合う。互いに変わり果てた姿であっても、思い出される記憶はつい昨日のこのようだった。

「遅かったな」

痩せこけながらも義足で堂々と立つベッカーは、はにかみながら口を開いた。

「逆に待たせてしまって申し訳ありません」

ティナは五年ぶりの敬礼をして言葉を返す。大きく見開かれた瞳は、当時の輝きを微塵も失っていないかった。

ティナはベッカーとの再会に別段驚かなかった。持ち前の「勘」が知らせていたのだ。ベッカーは生きていて、レイラの墓標の前に現れる。それは予知夢にも近い幾度も想像した光景だ。

なぜここにいるのかなどという疑問は湧いてこない。なぜなら、ベッカーは「すぐ戻る」という約束を果たしただけであり、ティナはこれに応じたただだからだ。

ティナに対して同じく敬礼で答えようとしたベッカーは、杖を落としてバランスを崩す。ティナはすぐさま駆け寄ってベッカーの肩を支えた。そして、初めてベッカーの体に触れたことに気付いた。

ベッカーはティナの介助を拒むことなく肩を預ける。そのままゆつくりと杖を拾い上げ、その先で義足を叩きながら呟いた。

「あの後、地上に降りて這いまわったときにこの足を撃たれてな。捕虜をやってるうちに腐り落ちたんだ。内戦もその間に終わっていた。この軍服も引つ張りだしてきただけで、今は単なる一平民だ」

「私も似たようなものです。あのときの怪我で右目の視力を失いました。お陰でパイロットを辞めさせられて、今は何も残っていません」

二人は互いの体を支え合いながらレイラの墓標を見つめあう。

ティナは思い出したかのように花を添え、ポケットからあの時の懐中時計とコンパスを取り出した。

結局、五年間の歳月は二人にとって何の隔たりにもならなかった。色々なものを失っていたとしても、二人の関係はあの時から変わらない。「時計の針」は止まったままだ。

それでも懐中時計は今なお時を刻み続け、コンパスは休むことなく同じ方向を指し続けている。る。

それを見たベッカーは目を細め、空を眺めながら口を開いた。

「時計の針を止めるな、か。自分で言っておいて何だが、俺の方が時の中においていかれてたのかもしれないな」

その顔は、切なさを帯びて夕日に照らしだされていた。

「私もこれからどうすればいいかわかりません。なんだか、何もかもやりおえちゃったみたいなき感じですよ」

微笑みながらそう答えるティナの顔は、切なさに満ちている。今や飛ぶことを失い、全ての目的を果たしたティナにとって継げるものは何もない。行くべき方向もわからなければ進む意欲も持ち合わせていなかった。

それを見たベッカーはティナの肩を強く押さえ、何かを決断したかのように向き直った。

「ならもう一度飛ぼう」

そう言い放ったベッカーの口調は、五年前の鋭さを再び取り戻していた。

1
2

体を支え合った二人は、旧基地内のハンガーにやってきた。

建屋は一部が焼けおちているが、屋根が健在だったためハンガーとしての機能をまだ果たしていたのだ。

ベッカーと共にその中に入ったティナは感嘆の声を漏らす。

「これは……」

二人の目の前には、かつて何度も目にした青い翼を持つ美しい機体が鎮座していた。

モランデル——ティナのパイロット人生において殆んどの時間を共に過ごした相棒が目の前にある。

しかし、見覚えのある点はいくつか目につくが、愛機の姿はティナが乗っていた当時とは少し異なるようだった。

一番の特徴は操縦席だ。なぜか複座になって二人乗れるように改造されている。また、特徴的だった主脚はティナが体当たりで木端微塵に破壊してしまったせいも、自動引き込み式のスマートなものが取り付けられており、その印象を大きく変えていた。エンジンも大出力のものに換装されているようで、様々な装備も後付けされている。まさに生まれ変わりとさえ言う。

「お前が胴体着陸した後、焼け落ちた機体から部品をかき集めて作った複座の練習機らしい。よっぽど機体不足だったんだな。内戦が終わった後は、敗戦処理の担当として復員した俺がどうにか取り合って連絡機として残してもらったんだ。平和が続けばそのうち博物館にでも運ばれるかもしれないな」

そう言いながらベッカーは似合わない高笑いをあげる。

ティナはたまらず〈モランデル〉に駆け寄り、その胴体に縋りついた。

五年ぶりに触る外板の感触は記憶通りだ。ティナは親に甘える子供のように、何度も機体に体を寄せる。その目にはいつの間にか涙が浮かんでいた。

「乗ってみるか？」

ベッカーは誘うような口調でティナに問いかける。魂胆は見えない。

そして対するティナの方も答えは決まり切っていた。

「本当に昔のままね！」

上空二〇〇〇メートルでティナは大空に向かって叫んだ。〈モランデル〉の風防は開け放たれており、空を切る風がティナとベッカーを覆っている。

前部座席を陣取り、操縦桿を握るティナの生き生きとした顔つきは現役当時のそれと瓜二つだ。

五年ぶりに操縦席に着いたティナはダブついた古びた飛行服に身を包み、髪は結いまとめてフライトキャップの中に収めている。幸いにして基地内に飛行服の予備が残っていたが、小さな体のティナに合うサイズのものではなかった。それでも着こなしてしまうのが女パイロットの知恵だ。

〈モランデル〉の方も操縦の具合や計器類は異なっていたが、その飛行特性は褪せることなく機体に染みついていた。独特な感覚は操縦桿からありありと伝わってくるようだ。

「あまりはしゃぐと墜落するぞ」

後部座席に座るベッカーが軽い口調で釘を刺してくる。〈モランデル〉は複座にするにはは小柄な機体なため、ギリギリまで寄せられた後部座席からは声が簡単に届く。

「私を誰だと思ってるのよー」

ベッカーの忠告を軽くあしらったティナは、乱暴に操縦桿を倒して急上昇に移った。

機体はどんどん速度を失い、失速し始める。ベッカーはその様子に心配を抱くこともなく外の様子を眺める。

日は既に落ち、周囲は薄暗くなり始めている。上空から見る大地は戦火の跡が色濃く残っているが、既に草木が根を下ろし美しき昔の面影を取り戻そうとしている。

濃紺に覆われ、まばらに散る星が瞬く。紫に化粧をした大地は風になびかれ波を作る。ティナの追い求め続けた最高の空は、今や目の前に広がっていた。

〈モランデル〉の速度が限界近くまで落ちたところで、ティナはエンジンを停止させて一気にフットペダルを踏み込んだ。急に横に振られた〈モランデル〉は、そのまま失速を起こしてスピンを始める。それは、ティナが脳裏に焼き付けた最後の機動だ。

「まさか、あれをやるのか！」

これから起こることを予期したベッカーは突如驚きの声をあげる。ティナは、そんな風に慌てるベッカーの姿を初め見れてなんだか嬉しくなった。

揚力と推力を失った機体は、跳ね上げられたボールのように空中で飛躍する。真横に回転しながら大空を跳ねる〈モランデル〉の姿は、華麗なジャンプをきめたダンサーさながらだ。

その機動は、〈白いフェスカ〉が最後に見せた「スピン旋回」そのものだった。エンジンは停止し、風切り音だけが耳に届く中で空と大地はゆっくり回転する。景色は七色の変化を見せ、風は優しく頬を撫でる。

これほど心地よい空間はこの世に存在しないだろうとティナは思う。〈白いフェスカ〉は、戦うためではなくこの空間を堪能するためにこの究極の技を編み出したのだろうとすら思えてきた。共に空を愛した者として、今になって親近感を抱く。

「相変わらず無茶なことを」

スピンを終えたところで、安堵したベッカーが声をかける。

今のティナには無茶など存在しない。自分が不可能だと思えた技だって簡単に再現することができた。全ての自信は空が与えてくれるのだ。

アクロバット飛行に満足したティナは〈モランデル〉を水平飛行に移し、そのまま優雅に空を舞う。

青い翼が月明かりを反射させ、二人の顔を照らしだす。その顔は満足感に満ち満ちていた。

「あの、もしよければベッカーさんがどうしてパイロットになったのか教えてくれませんか？」
 ティナは急に声のトーンを落としてベッカーに問いかける。

「それを聞いてどうする」

「ただ知りたいだけです。私はベッカーさんのことを何も知りません。どうして〈フエスカ〉に乗っていたのか、あの時どうやって地上に降りたのか、どうして捕虜になったのか、何でこの地にまだいたのか、全部教えてください」

「長い話になるな」

そう言いながら、ベッカーは顎をさすった。その癖は、かつてティナに飛行機のすべてを教えてくれた飛行体長にそっくりだった。

「話すだけじゃ面白くない。俺にもお前がパイロットになった理由やレイラとどうして出会ったのか、今まで何をして過ごしてきたのか教えろ」

「長い話になりますよ？」

「なに、時間はいくらでもある。五年間に比べれば短い」

ティナは振り向き、ベッカー共に頬笑み合う。胸の中ではコンパスと懐中時計がぶつかり、軽い音をたてる。

ティナは空の上で全てを取り戻した。これから先、迷うことも立ち止まることもしないと胸に誓う。それは空の上に限らない。

まず地上に降りたらベッカーにキスしてやろうと急に思い立つ。そんなことを考え出すと、あれほど楽しんでたフライトを止めて今すぐにも地上に降りたくなってきた。

自分の単純さに呆れたティナは、慣れ親しんだ手形のつく操縦桿を撫でてやさしく微笑む。ティナの時計の針は、今この瞬間に動き始めていた。

(了)

青き翼のモランデル

作者 八十八

第四回「俺的小説賞」応募作品 15 銀賞受賞作品

この作品の著作権は全て作者に帰属します。
無断転載は禁止しています。